

表紙, 目次, 雑纂, 抄録, 漫録, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38662

明治三十六年六月十三日發行

十全會雜誌

第二十七號

（非賣品）

全澤醫學專門學校十全會

十全會雜誌第二十七號目次

○原著

○顔面神經ハ果シテ單純運動性

ナル歟

醫學得業士 森田 齊次

○日本人ノ脊髓(第一回報告)(承前)

醫學得業士 久保 武

○處女ニ於ケル卵巢肉腫ノ一例

醫學得業士 越野義三郎

○雜纂

○實驗瑣談

南 溪 生

○抄録

○「コルラルゴール」ノ靜脈内注射ヲ以テスル腐敗性疾

患ノ療法

ク レ ー デ

○蠟燭突起炎ニ於ケル「ロイコチーテン」ノ關係

コ ス テ ー

○「アドレナリン」ニ就テ(動物試験)

レ ー マ ン

○急性梅毒性腎臟炎

ワ ル ト フ オ ー ゲ ル

○副學丸炎性膿瘍内ニ於ケル淋疾球菌陽性所見ノ一例

カ ル ウ オ ウ ス キ ー

○軟性潰瘍ノ療法

キ ル ス タ イ ン

○泌尿器病ノ實地ニ於ケル「アドレナリン」

フ リ ッ シ ャ

○瘰癧ニ對スル一新法

ス ト レ ー テ ル

○ロエントゲン光線透射後ニ發シタル皮膚萎縮ノ一例

シ ミ ッ ト

○沃度製劑殊ニ沃度加里及「ヨナベン」ノ體內ニ於ケル
状態ニ就テ

(以上十項、南溪抄)

○珈琲混及「テオプロミン」ノ分離并ニ定量ニ就テ

(以上三項、謙中抄)

○漫録

○醫學博士木村孝藏先生の經歷

羽根田 信次

○會報

○叙任及辭令○會員動靜○金澤病院長の交遊○金澤病院の新築工事○石川
縣産婆講習所の設立○柔道部紀事○話部大會○紀念式○春期運動會○醫
科三年級々會○弓術部大會○書籍寄附○入退會者

○通信

○金子教授の通信

○公文

○文部省告示第三十號○勅令第二十六號○勅令第二十七號○勅令第六十一
號○文部省令第九號○文部省令第十號○カ部省令第十二號○文部省告示第
九十六號○文部省告示第九十九號

○會告

○寄贈及交換書目○會費領取



○實驗瑣談 (其二)

南溪 生稿

(四) 急性限局性皮膚水腫ノ一例

急性限局性皮膚水腫 (Oedema cutis circumscriptum acutum) ナル症ハ一千八百八十三年クキンケ氏ノ報告アリテヨリ以來始メテ人ノ多ク知ル所トナリタル者ニソ所謂クキンケ氏皮膚水腫 (Quincke's Handoedem) ナル者は是ナリ爾來泰西諸國ニ於テハ其實驗例ヲ報告セル者相踵テ出デ今一々之ヲ枚擧スルニ違アラズト雖モ本邦ニ於テハ之ヲ實驗セル者尙甚ダ多カラザル者ノ如ク余ハ只其二三ノ例アルヲ記憶スルノミ然ルニ余ハ從來本症ト認ム可キ患者ニ遭遇セルヲ前後四回ニ及ビタリシモ其中三人ハ外來患者ニソ共ニ只一回ノ診察ニ止マリ其經過ヲ觀察スル

ト能ハザリシヲ以テ今ハ只茲ニ最後ニ實驗セル一患者ヲ擧グルノミ該患者ハ危險ナル喉頭狹窄症狀ヲ以テ來院シ直ニ入院治療ヲ施シタル者ニソ親シク其症狀及經過等ヲ觀察スルヲ得且實地上亦興味寡カラザル者ト思惟スルヲ以テナリ

蓋シクキンケ氏以來泰西諸家ノ實驗セル所ニ憑レバ本症ニ特異ノ症狀ハ多クハ突然皮膚ノ隨處ニ鳩卵大乃至拳大ニ達スル限局性浮腫樣腫脹ヲ來スニ在リテ其腫脹ハ主トシテ皮下結締織内ニ存シ眞皮ノ侵サルハ少シ而シテ該腫脹ハ亦同時ニ處々ニ發スルヲ有レモ只一局所ニ止ルト少カラズ或ハ又粘膜ニ同様ノ腫脹ヲ呈スルヲ有リ蓋シ如斯腫脹ハ大抵二三時間ニシテ其極度ニ達シ次デ六七時間ノ後又遲クモ四十八時間ノ後ニハ全ク消散シテ毫モ其形跡ヲ留メザル者ナレモ罕ニハ再三同一部ニ再發症ヲ來シ之ガ爲メ該部ノ皮膚ニ弛緩ヲ起シ或ハ其一部ニ肥厚ヲ貽スヲ有リ又患部ノ皮膚ハ通常稍々明劃ニ健部ノ皮膚ト分界セラル、モ其色ハ健部ト異ナラザルヲ有リ或ハ却テ稍

蒼白ヲ帶ブコ有リ或ハ罕ニハ微ニ赤色ヲ帶ブコ然リ而シテ其皮膚ニ發シタル者ニ於テハ患者只僅ニ緊張及灼熱ノ感ヲ自覺シ或ハ時ニ輕度ノ癢痒ヲ覺ユルコ有ルニ過ギザレモ足蹙ニ發スルキハ爲メニ歩行ヲ妨碍スルコ有リ但シ最モ多ク侵サル、所ハ顔面ニシテ(余ノ四例ニ徵スルモ三例ハ顔面ニシテ一例ハ前膊ヲ侵セル者ナリキ)粘膜ハ殊ニ口唇、舌、口蓋帆、咽頭及喉頭ノ侵サル、コ多ク舌ニ腫脹ヲ來スキハ爲メニ咀嚼及談話ヲ妨ゲ咽頭及殊ニ喉頭ニ發スルキハ嚥下及呼吸ヲ障碍スルノ危險アリ此他又時トシテ水腫ヲ發スルニ先チ身神不和、食思不振、全身倦怠、頭痛等ノ症狀ヲ伴フコアリ或ハ每發作時嘔吐ヲ來スコ有リ嘗テヨゼーフ氏ハ五歳ノ男子ニ於テ發作時一時的血色素尿ヲ發シタル者ヲ見又紫斑ヲ發シタル者ヲ見タル人アリ、要スルニ本症ノ主徵トスル所ハ限局セル浮腫ノ隱顯出沒神速ナルコ恰モ蕁麻疹性發疹ノ如クナルニ在リ、然リ、實ニペーレンド、カボジー、ナイセル、ヤダッソン、エスチル等ノ諸家ハ本症ヲ以テ蕁麻疹ニ屬スル者ト爲シ

敢テ特種ノ疾患ト看做サル者ノ如ク又ミルトン氏ノ巨蕁麻疹 (Giant urticaria (Riesenurticaria)) ナル者ハ本來クキンケ氏ノ皮膚水腫ニ外ナラズト爲ス者アリ然レモマキス、ヨゼーフ、ヤーリシユ、ウォルフ、ストラウス氏等ノ如キハ之ヲ蕁麻疹ト區別シ就中ヨゼーフ氏ノ如キハ本症ハ時ニ蕁麻疹ト合併シ來ルコ有ルモ全ク之ト區別ス可キ特殊ノ疾患ナリト論ゼリ此說ノ是非ニ就テハ余ハ爰ニ之ヲ明言スル能ハズト雖モ余ノ一例ニ於テハ本症ノ經過中ニ定型的ノ蕁麻疹ヲ發シタルヲ以テ觀レバヨゼーフ氏ノ謂ルガ如ク特立ノ疾患ニ非ズシテ寧ロペーレンド、カボジー、ナイセル氏等ノ稱道スルガ如ク蕁麻疹ニ屬セシム可キ者ナラム歟

然レモ本病發生ノ原因及其病性ニ至テハ尙明瞭ヲ闕ク少カラズクキンケ、リール、ヨゼーフ氏等ハ皮膚ノ冷却ハ其發生ニ關係アリト爲シ又冷水ニ觸レテ本症ヲ發シタルヲ説ク者アリ又ヨゼーフ、カスパリー、オッペンハイム氏等ノ如キハ過度ノ酒精飲用ノ爲メ毎ニ之ヲ發スル者ヲ

見タリト云フ此他偶發原因トメ月經障礙、精神感動等ヲ舉グル者アリ而ノ男女兩性ニ關シテハ男子ニ多シト云フモ(余ノ四例ニ於テハ男女相半バス)本病ハ蕁麻疹ニ於ケルガ如ク之ニ侵サル、特異素因ヲ有スル者ニ來ル者ニシテ之ガ遺傳素因アル者ハ既ニ幼齡ノ頃ヨリ發シ年齡ハ之ニ關係ナキ者ノ如シ但シ斯ノ如キ限局性ノ水腫ヲ來ス「メハニスムス」ニ就テハ從來組織學的檢索ヲ闕クヲ以テ確實ナル説明ヲ下スト能ハザルモ局所ニ於ケル血管神經ノ

障礙ニ歸ス可キ者タルヲハ諸家ノ齊シク認ムル所ニシテ或ハ血管擴張神經ノ刺戟ノ爲メ一部血管ノ擴張ヲ來シ以テ限局性ノ滲出ヲ來スニ因ル者ト爲スモウンナ氏ノ如キハ反テ靜脈痙攣ノ爲メ一部ノ血行障礙ヲ起シ以テ此水腫ヲ起ス者ナリト説ケリ

今左ニ余ノ一例ヲ舉ゲ以テ學生諸子ニ示サントス

(既往症) 二十九歳ノ女、某官吏ノ妻タリ、父ハ七十

七歳ニシテ老衰ノ爲メニ斃レ、母ハ七十歳ニシテ心臟病

ニ因リ鬼籍ニ上レリ、同胞八人、其ノ中四人ハ夭折シ

(病因不明) 一人ハ子宮癌ノ爲メニ死シ他二人ハ健存シ血族中神經系統其他遺傳性ノ疾病ニ罹リタル者アルヲ聞カズト

患者生來強健ニシテ幼時種痘及麻疹ヲ經過シ只十四歳及十五歳ノキ而回麻拉利亞ニ罹リタルヲ有リ其他十九歳ノキ右肩脚關節及同側肘關節ノ僕麻質斯性疼痛ニ罹リタルモ二十日許ニシテ治セリ、月經ハ十六歳ニシテ始メテ潮來シ爾來整然其期ヲ誤リタルヲ無カリシガ昨年六月以來大凡五ヶ月間經行全ク閉止シタリ然レモ之ガ爲メ毫モ他ニ異常ヲ覺ヘザリシヲ以テ放任セリ、分娩數ハ三回ニシテ初産ハ二十二歳ノ時、次ハ二十四歳、終リハ二十七歳ノ時ニシテ妊娠及産褥中ノ經過ニ於テモ異常無ク三兒ハ共ニ強健ニ成育シツ、アリ此他患者ハ時ニ感冒ニ罹リタルヲアルノ外醫治ヲ要ス可キ程ノ疾患ニ罹リタルヲ無シト云フ』然ルニ本年(明治三十五年)二月二十七八日ノ頃毫モ原因ノ認ムベキモノ無クシテ晩食後俄然右側下唇ノ半分著シク腫脹シ僅ニ潮

紅ヲ呈シタルモ別ニ自覺症ナキヲ以テ放任セシニ翌朝ニ至リ該腫脹ハ全ク消散シテ毫モ其痕跡ヲ留メザリシ、次デ三月八日(前症ヲ發シテヨリ約十日間ヲ經テ)ノ朝ニ至リ咽喉ノ内部ニ微痛アルヲ感ジタリシガ同日薄暮所用ノ爲メ外出シテ歸宅セシニ該部ノ疼痛増劇シ殊ニ喉頭ニ狹窄ノ感アリ斯クテ呼吸頓ニ困難トナリタルヲ以テ惶惶我金澤病院外科部ニ馳セ來リテ治ヲ乞フト云フ

(現症及經過) 明治三十五年三月八日午後九時、之ヲ診スルニ體格強實、榮養佳良ノ一女子、一見頗ル呼吸困難ノ狀ヲ呈シ聲音啞嘶シ殆ント無聲ト爲リ視診上喉頭ノ外部僅カニ腫脹スル者ノ如キモ他ニ異常ナク之ヲ壓迫スルニ少シク疼痛アルノミ口腔内ヲ檢スルニ粘膜ハ咽喉腔ニ至ルマデ充血、腫脹等ヲ呈セザルモ頭喉鏡検査上殊ニ喉頭口部ノ粘膜著シク浮腫狀ニ腫脹セルヲ認メタリ但シ嚥下作用ニハ著シキ障礙ナキガ如シ、體温三十八度、脈搏百至、呼吸困難アルモ未ダ氣管切開

術ヲ施スノ必要ニ迫ラザリシヲ以テ頸圍ニアリースニツツ氏卷法ヲ施シ内服ニハ單ニ鹽酸里母那埜ヲ與ヘテ其經過ヲ觀察セリ、此日便利一行、尿利及尿性ニ異常ナシ(此日ノ所見ハ當直醫員ノ記錄ニ據ル)

三月九日、朝體温三十八度五分、脈搏百十至ナレモ呼吸困難ハ前夜ニ比シテ増悪スルコト無ク正午ニ至リテ僅カニ輕快セリ、晚熱三十八度八分、脈搏百五至、便通ナシ、此日ヨリ鹽里母水ニ硫苦ヲ伍用ス、爾他前處置ニ同ジ

十日、朝體温三十八度二分、脈搏九十五至、晚間體温三十八度三分、脈九十至ナルモ呼吸障礙ハ前日ニ比シ更ニ輕減シ疼痛殆ト消散ス、此日便通四行少シク下利ス、尿ニ異常ナシ、處置同上
 十一日、朝體温三十八度、脈搏八十至、晚間體温三十八度三分、脈搏九十五至、便通一行、尿ニ異常ナク此日呼吸大ニ安靜、喉頭ノ浮腫殆ト消退ス
 十二日、朝體温三十七度三分、脈搏八十至、晚間體温

三十七度三分、脈搏八十五至、呼吸平常ト異ナルヲ無シ、頸部ノ濕布捲法ヲ撤去ス

十三日ヨリ體温、脈搏殆ンド平常ニ復シタレモ午前八時頃ヨリ俄然全身ノ處々ニ發疹ヲ來シ癢痒甚シク次デ九時頃ニ至リ亦俄カニ上口唇ニ腫脹ヲ來セリ、之ヲ細檢スルニ頭髮部ヲ除クノ外ハ顔面、頸部ヨリ軀幹及四肢ニ亘リ一汎ニ小豆大ヨリ爪甲大ニ達スル無數ノ發疹アリ其色ハ或ハ蒼白色或ハ稍々帶赤蒼白色ニノ周圍ノ皮膚ト明劃ニ分界セラレ且僅カニ隆起セリ殊ニ背部、大腿及下腿ノ屈曲面ニ發疹最モ多數ニノ試ミニ指頭ヲ以テ皮膚面ヲ強ク擦過スルニ最初其部潮紅シ次デ蒼白色ヲ呈スル隆起線ヲ生ゼリ、更ニ顔面ヲ檢スルニ上口唇ノ粘膜及之ニ接スル一帶ノ皮膚一般ニ著シク腫脹シ爲ニ上唇ハ前方ニ突出シ吻狀ヲ呈ス而シテ其腫脹ハ限局性ニノ稍々明カニ周圍ノ皮膚ト限劃セラル、モ腫脹部ノ皮膚ニハ殆ンド變色ヲ認メズ只微カニ紅色ヲ帶ブルカノ觀アルノミニ之ニ觸ル、ニ硬固ニノ稍々彈力性

ナリ壓スルモ壓痕ヲ生ズルヲ無ク毫モ疼痛ナク又患者該部ニ癢痒ヲ覺ヘザルモ僅ニ緊張ノ感アリト云ヘリ、此日上圍二回少シク下利セシモ食慾常ノ如ク尿亦異常ナシ、斯クテ上唇ノ腫脹ハ夕刻ニ至リテ全ク消散シタレモ發疹ハ消退セズ只舊疹ノ消散スルヲ見ルモ更ニ新疹ヲ續發セリ

十四日、體温脈搏共ニ尋常ナレモ全身ノ發疹ハ隱顯出沒全ク消散スルニ至ラズ、此日下利七回、依テ硫苦劑ヲ止メ單ニ鹽里母水ヲ與フ

十五日、朝發疹尙退カズ此日更ニ亞篤比涅〇、〇〇一ヲ三回ニ分服セシム晚ニ至リ發疹ハ全ク消散セリ

十六日、朝間尙發疹アリタレモ正午ニ至リ消散セリ、處置前日ニ同ジ

十七日、發疹ヲ認メズ患者毫モ病苦ノ身ニ在ルヲ覺ヘザルヲ以テ退院ヲ乞フ依テ尙前方ヲ與ヘテ再來ヲ約シ退院セシム

十九日、午前患者外來診察所ニ來リタレモ退院後發疹

無ク其他毫モ身體ニ異常ヲ感セズト云フ之ヲ診スルニ
 全身ニ病徴ト認ムベキ者ナキヲ以テ此日ヨリ服藥ヲ休
 止セシメタリシガ爾來今ニ至ルマデ前症再發ノ報ニ接
 セズ

上來述ベタル患者ノ既往症、現症竝ニ其後ノ經過ニ徴ス
 ルニ本患者ハ二月二十七八日ノ頃俄カニ下唇半側ニ腫脹
 ヲ來シタルモ直ニ消散シ次デ三月八日亦俄然呼吸障碍ヲ
 來シタルモ數日ニシテ消退セルハ全ク粘膜ノ一時的浮腫
 性腫脹ニ因ル者ニモ其後十三日ニ至リ蕁麻疹ニ兼スルニ
 上唇一汎ノ急性浮腫ヲ以テシ一日ノ間ニ消散セル等皆
 是レクキンケ氏ノ所謂急性限局性皮膚水腫ノ病狀ニ非ザ
 ルハ無シ只本症ニハ恐ル可キ喉頭粘膜ノ浮腫ヲ來シ大ニ
 呼吸障碍ヲ起スニ至リタルハ臨床家ノ宜シク注意スベキ
 所ニシテ且上唇ノ急性限局性皮膚水腫ニ蕁麻疹ヲ伴ヒタル
 ハ本病ノ蕁麻疹ト其病性ヲ共ニスベキ者タルヲ疑ハザ
 ラシム只蕁麻疹ニ於テハ滲出機^{エキスキメカニオン}ハ眞皮ノ中層及下層ニ發
 來スルヲハウシナ其他諸家ノ研究ニ由テ明ナレヒ急性皮

膚水腫ニ於テハ從來組織學的検査ヲ闕クモ其滲出機ハ主
 トシテ皮下蜂巢織内ニ發來スルノ差アルノミ故ニ組織學
 上ヨリ論ズルキハ滲出機ノ起ル部位コソ異ナレ此両症ハ
 恐ク其「パトゲチーゼ」ヲ同フスル者ナラム然レモ余ハ本
 患者ニ就テ親シク検査ヲ遂ゲタルモ本症發生ノ原因若ク
 ハ誘因ヲ探知スルヲ能ハザリギ (此稿未完)

* * * * *

孤 録

○「コルラルゴール」ノ靜脈内注射

ヲ以テスル腐敗性疾患ノ療法

(v. Langenbeck's Archiv Bd. LXIX. Hft. 1 u. 2.)

諸種ノ腐敗性疾患ニ所謂クレーデ氏銀軟膏ヲ用キテ奏效
 アルヲハ人ノ知ル所ナルガクレーデ氏ハ該軟膏ヲ使用ス
 ルニ適セザル場合例之皮膚吸収機ノ不全ナル際、軟膏塗
 擦ノ爲メ疼痛ヲ起ス際又ハ病毒傳染重惡ニシテ塗擦療法ノ

速ニ奏效ヲ期シ難キ際等ニ「コルラルゴール」(Collargol)ヲ靜脈内ニ注射スルノ甚ダ可ナルヲ唱道セリ即チ此溶解性ノ銀ヲ時機ヲ撰ンテ血中ニ輸スルハ患者ノ全身症狀數時間ニ著シク佳候ヲ呈スル者ニシテ重症ノ疾患ニ於テハ八時乃至十二時間ヲ隔テ、注射ヲ反覆施行ス可ク病症速カニ重惡トナル者ニハ早ク注射法ヲ反覆シ且其量ヲ増加ス可シ之ガ爲メ蓄積作用ヲ來スハ之レ無シト云フ注射法ハ單簡ナレモ人ニ由リテハ肘窩部ノ靜脈内ニ注射スルヨリモ手背又ハ足背ノ靜脈ニ注射スルヲ良トスルコト有リ危急ノ際ニハ外頸靜脈内ニ注射スルモ可ナリ皮下注射ハ效ヲ奏スルコト無シ之ガ爲メ不幸ノ轉歸ヲ來スコト無シ著者ハ目今ニ「コルラルゴール」溶液ニ乃至十立方仙迷ヲ用ユ催炎菌ノ數ハ此靜脈内注射後毎常速カニ減少セリ蓋シ本劑ノ效用タル純然タルバクテリチチヂヂノ非ルコト微菌殺滅作用ニ「ロイコチーテン」ノ數ニハ變化ナキカ或ハ稍々減少セリ故ニクレーデ氏ハ之ヲ以テ「アンチトキシシ」的ノ作用ニ歸ス可カラザル者トセリ而シテ氏ハ輕症及中等度ノ疾患ニハ塗

擦療法ヲ採用スルモ重症ノ者ニハ銀ノ靜脈内注射法ヲ賞用セリ殊ニ氏ノ之ヲ使用シタル疾患ハ重症ノ蜂窠織炎、壞疽、敗血症、產褥熱、膿毒症、腐敗性骨髓炎、腐敗性多發關節炎、潰瘍性心臟内膜炎、重症丹毒、腹膜炎、結節性紅斑、脾脫疽及絶望セル肺勞ニシテ後症ニ於テハ注射後二三週間ハ熱候、脈搏及全身狀態佳良ニ向ヒタル者多カリシト云ヘリ (南溪抄)

○ 蟲樣突起炎ニ於ケル「ロイコチーテン」ノ關係

チーテン」ノ關係

(Münchener med. Wochenschr. 1902. Nr. 49.)

コステー氏ハ二十九例ノ蟲樣突起炎患者ニ就テ「ロイコチーテン」ノ關係ヲ研究シ左ノ成績ヲ得タリト即チ急性蟲樣突起炎ニ於テ「ロイコチーテン」ノ數尋常ニ止マルカ或ハ只一時僅カニ増加スルルキハ蟲樣突起ニ限局セル病機ナルカ或ハ其滲出物ハ漿液性ニノ經過ハ多ク輕易ナリ但シ爰ニ宜シク注意スベキコトハ蟲樣突起ニ限局セル疾患ニ在テモ何時糞石ノ穿孔ニ由テ化膿性腹膜炎ヲ繼發スルヤ

知ル可カラザルコトナリ尤モ此際ニハ白血球增多症ニ由ラズ病症ノ増悪スルニ由テ此變症ヲ知ル可シ而シテ蟲様突起炎ニ於テ白血球ノ數若シ二萬二千以上ニ達スルキハ必ズ膿瘍ヲ生ジタルノ徴トナスベシ化膿性腹膜炎ニ於テ白血球數ノ増加スルヲ見ルハ只身體ガ病毒傳染ニ對シ尙十分ノ抵抗力ヲ有スルキニ限レリトス而シテ最初著シク增多セル白血球數ノ俄然減少スルハ豫後不良ノ徴ナリト云ヘリ (南溪抄)

○「アドレナリン」ニ就テ(動物試験)

(Münchener med. Wochenschr. 1902. Nr. 49.)

レーマン氏ハ動物試験ニ徴シテ血液ニ富メル器質ノ種々ナル手術ニ「アドレナリン」ノ豫備的注射ノ有利ナルコトヲ知レリ但シ此際稍大ナル動脈ハ固ヨリ結紮セザル可カラズ即チレーマン氏ハ家兎、犬等ニ就テ肝臟切除術ヲ試ミタルニ切除前肝臟組織内及其囊膜下ニ〇、一%「アドレナリン」溶液一乃至二立方仙迷ヲ注射シタルニ其部ノ肝臟ハ全ク血虛トナリ貧血部ノ境域内ニ於テ著シキ出血ヲ

見ルコト無クシテ肝臟ノ大部分ヲ切除スルコトヲ得タリ而カモ術後後出血ヲモ起サハリシ是レ蓋シ「アドレナリン」ノ作用ニ由テ肝臟組織ノ切除面ノ毛細血管内ニ血塞ヲ生ジタルニ因ル者ナラント而シテ中毒症狀ハ一回ダモ見タルコト無シト云フ (南溪抄)

○急性梅毒性腎臟炎

(Deutsche med. Wochenschr. 1902. Nr. 41.)

ワルトフオーゲル氏ガ報告セル本症患者ハ三十一歳ノ男子ニシテ特異ノ咽頭疾患ヲ證明シ諸淋巴腺ノ腫脹ヲ呈シタル者ナリシガ俄然急性腎臟炎ノ症候ヲ呈發セリ仍テ氏ハ七十五瓦ノ灰白軟膏ヲ塗擦セシメタルニ浮腫消散シ尿中ノ蛋白質モ次デ消失セリ斯ノ如キ早期梅毒性腎臟炎ヲ發シタル事實ニ基キ著者ハ結論スラク諸他ノ腎臟病變即チ慢性、急性、實質性及間質性腎臟炎ハ種々ノ合併症ヲ以テ梅毒性毒質ニ由テ誘起セラル、者ナラムト (南溪抄)

○副睪丸炎性膿瘍内ニ於ケル

淋疾球菌陽性所見ノ一例

(Monatsch. f. prakt. Dermatologie, XXXV, Nr. 11.)

アダム、フォン、カルウオウスキー氏ハ此陽性所見ナルニモ
 拘ラズ總テノ淋疾性副睪丸炎ノ唯淋疾球菌ニノミ由テ起
 ルコトニ疑ヲ挾ミ且說ヲ爲シテ曰ク淋疾球菌ハ漿液性副
 睪丸炎ヲモ亦化膿性副睪丸炎ヲモ催起シ得可ク殊ニ該菌
 ハ尿道ヨリ直接ニ副睪丸及精系ニ遷移傳搬シ得可キコト
 ニ就テハ疑ヲ容レザル所ナレハ淋疾ノ經過中ニ發スル副
 睪丸炎ハ亦爾他ノ原因(外傷、血行障礙、「トキシ」子、混
 合傳染等)ニ由テ來リ淋疾球菌ノ之ニ關與スルコト無キコ
 有ルヲ否定ス可カラズト (南溪抄)

○軟性潰瘍ノ療法

(Dermatolog. Centralblatt, VI. Jahrg. Nr. 7.)

近時ナイセル氏ノ法ニ從ヒ新發ノ軟性潰瘍ニ流動性石炭
 酸腐蝕法ヲ行フコトノ潰瘍ノ蔓延ヲ防止スル上ニ最モ確
 實ナル一法タルコトハ人ノ知ル所ナルガマキス、キルス
 タイン氏ハ此法ノ尙不利ナル點アルヨリシテ他ニ尙之ニ
 優ル所ノ療法無キヤヲ考ヘ遂ニ沃度丁幾ハ石炭酸ヨリモ

奏效確實ニ、迅速ニ且其作用ノ不快ナラザルコトヲ發見
 セリ即チ氏ハ木片ノ尖端ニ綿花ヲ纏ヒ之ヲ沃度丁幾ニ浸
 シテ潰瘍面ヲ拂拭セリ而シテ必要アルキハ二十四時ノ後
 ニ此法ヲ反覆セリ然ルキハ肉芽面ハ甚ダ速カニ萎縮スル
 ヲ以テ其後ニハ「テルマトール」或ハ之ニ類似ノ粉末劑ヲ
 散布スルノミニテ足レトス氏ハ此法ヲ四患者ニ試用シ
 驚ク可キ速効ヲ認メタルヲ以テ廣ク之ガ使用ヲ試ミラレ
 ンコトヲ望メリ蓋シ此療法ノ特ニ利益トスル所ハ治癒機ノ
 迅速ナルニ在リ石炭酸ヲ用ルキハ其肉芽ノ發生ヲ妨碍ス
 可キ性質ノ結果トシテ潰瘍面ハ稍々遲鈍ノ狀態ヲ呈シ其
 治癒ニ至ルニハ可ナリ長時間ヲ費ス可キモ沃度丁幾ヲ用
 ヲルキハ潰瘍面ハ細顆粒狀ノ肉芽組織ヲ呈シテ速カニ萎
 縮シ周圍ノ皮膚モ之ニ伴フテ縮シ創面ノ治癒甚ダ速カ
 ナリ。第二ノ利益ハ其使用ノ輕便ナルニ在リ易流動性ノ
 沃度丁幾ハ最モ容易ニ全潰瘍底面上ニ配布セラレ之ニ由
 テ生ジタル褐色ノ著色ハ以テ諸部分ノ藥液ニ觸レタルヤ
 否ヲ知ルニ容易ナリ且之ガ爲メ殆ンド疼痛ヲ起スコト無

シ之ニ反シテ石炭酸ヲノ確實ニ奏效セシメンニハ稍々強劇ニ之ヲ使用シ且注意シテ潰瘍ノ諸部ニ之ヲ擦入セザル可カラズ否ラザレバ其性状ノ油狀ナルガ爲メ創液ト混合セザレハナリ著者ハ尙附記シテ曰ク沃度丁幾ヲ肉芽創面ニ使用スルコトハ既ニ古クヨリ行ハレタル法ニシテ軟性下疳ノ後ニ生ジタル肉芽面ニモ之ヲ用キタル者アリタリト雖モ余ノ知ル所ヲ以テスレバ軟性潰瘍ノ初期ニ消毒ノ目的ニ使用シタルハ未ダ之レ有ラザル者ノ如シト (南溪抄)

○泌尿器病ノ實地ニ於ケル

「アドレナリン」

(Wiener klin. Wochenschr. 1902. Nr. 31.)

ア、フォン、フリッシュ氏ハ「アドレナリン」ヲ泌尿器諸病ニ使用シ其效用ヲ述ベテ曰ク本劑ノ一萬倍溶液百乃至百五十瓦ヲ膀胱内ニ注入シ三乃至四分時間之ヲ其中ニ止メ置クキハ膀胱ヨリスル出血ハ全ク止ムヲ以テ次デ膀胱内ヲ洗滌スルキハ其内容直ニ清澄トナルガ故ニ膀胱鏡検査ヲ行フコトヲ得可シ又高切開術ニ由リ膀胱ノ腫瘍ヲ摘出ス

ルニ當リテモ千倍ノ「アドレナリン」溶液ヲ以テ患部ヲ拭フトキハ殆ンド血液ヲ失フコト無クシテ腫瘍ヲ摘出スルコトヲ得可ク從テ確實ニ其根底ヨリ全ク摘出スルコトヲ得可シ恐ル可キ後出血ニ對シテ氏ハ粘膜ノ闕損部ヲ縫合ニ由テ閉鎖スルコト能ハザルキハ注意シテ創所ニ痂皮ヲ作ラシメ且膀胱内ニ栓塞法ヲ施セリ此他尿道狹窄及攝護腺肥大アル者ニ「カテーテル」ヲ送入スルニ當リテモ千倍ノ「アドレナリン」溶液ヲ尿道内ニ注入スルキハ粘膜ノ腫脹ヲ減ズルヲ以テ著シク其送入ヲ容易ナラシム、終リニ著者ハ攝護腺肥大ニ於ケル急性ノ全尿閉症ノ患者數人ニ千倍ノ「アドレナリン」ニ立方仙迷ヲ尿道攝護腺部内ニ注入シタルニ最初ハ奏效十分ナラザリシモ次回ヨリハ患者自然ニ尿ヲ排出スルコトヲ得タリト而シテ氏ノ使用セル者ハ鹽化「アドレナリン」○一、食鹽○七、「クロロートン」○五、餉水一○○○ノ混液ナリト云フ (南溪抄)

○痔瘡ニ對スル一新法

(Munch. med. Wochenschr. 1902. No. 35.)

現今毒瘡發生ノ豫防及治療ニ使用セラル、諸種ノ枕子ハ

患者身體ヲ動かストキハ無キ間ノミ之ヲ用キテ壓迫ヲ防グコ
ヲ得レヒ患者身體ヲ動かストキハ壓迫ヲ蒙ル痛所或ハ

創所ハ枕子ノ邊緣ニ觸レテ反テ新タニ刺戟セラル、ノ恐

アリ著者ストレーテル氏ハ此害ヲ防ガンガ爲メ患者ニ適

良ナル一種ノ敷板ヲ工夫セリ此敷板ハ幅十仙迷長サ十二

仙迷ノ毛布板ヨリ成リ其中央ニ直径四仙迷ノ孔ヲ具ヘ其

上面ニ粘著物質ヲ塗布セル者ニシテ板ハ之ニ由テ體部ニ

固著スルヲ以テ身體ヲ動かスモ移動スルコト無ク以テ痛所

及創所ノ壓迫ヲ防グコトヲ得可シト云フ氏ハ此ノ保護板ヲ

數多ノ患者ニ使用シタリシニ板貼用後疼痛ハ直ニ消散シ

二日間ニシテ已ニ創所ニ乾燥セル痂皮ヲ形成シ五六日ニ

シテ之ヲ除クコトヲ得タリシガ痂皮下ノ皮膚ハ再ヒ健常ニ

復セリト但シ此敷板ハ創ノ治後モ尚貼置スルヲ良トシ若

シ緩ムキハ新規ノ者ヲ貼附ス可シト云フ (南溪抄)

○ロエントゲン光線透射後ニ

發シタル皮膚萎縮ノ一例

(Archiv f. Dermatologie u. Syphilis, 1903.

Bd. 64. Hf. 1. n. 2.)

ハ、エ、シミット氏ノ報告ニ一患者千八百九十六年ニ手ヲ

撮影セントシテ其右手ヲ半時間ロエントゲン氏放散線中

ニ置キタリシニ爾後二三周日ヲ經過シテ患者其部ノ皮膚

ニ赤色ヲ呈スルヲ認メ此ノ本來鮮赤色ナリシ皮膚ハ其冬

ニ至リテ青赤色ニ變ジ同時ニ皮膚菲薄トナレリ著者ノ檢

シタルキハ右手掌骨上ノ皮膚ハ蒼白色ヲ呈シ著シク菲薄

トナリタレヒ觸神、溫神及痛覺ニハ變常ヲ證明スルコト能

ハズ指骨ノ關節端ハ稍々肥厚セリト云フ本例ニ於テ殊ニ

興味アルハ只一回ノ透射後ニロエントゲン光線皮膚炎ヲ

發シ之ニ皮膚萎縮ヲ繼發シタルニ在リ (南溪抄)

○沃度製劑殊ニ沃度加里及「ヨデピ

ン」ノ體內ニ於ケル狀態ニ就テ

(Archiv f. Dermatologie u. Syphilis, 1903.

Bd. 64. Hf. 1. n. 2.)

フリッツ、レンセル氏ハ本題ニ就テ研究セルノ結果左ノ如

ク論決セリ曰ク

沃度ノ尿中ニ排泄セラル、間ハ血中ニモ亦其循環スルヲ認ム

體內ニ輸シタル沃度加里ハ諸般ノ器質内ニ於テモ亦只沃度加里トシテ含有セラル、者ニシテ沃度ノ分離セラル、コハ血中ニ於テモ又遠隔ノ器質内ニ於テモ證明スルコ能ハズ故ニ沃度加里ノ奏效アルハ唯沃度其者ニ非ズシテ沃度鹽(沃度加里)全體ノカナリ沃度中毒症ノ原因モ亦之ニ由來セサル可カラズ又總テ沃度劑(沃度蛋白、沃度脂肪等)ニシテ體內ニ於テ沃度亞爾加里ニ變化セラル、者ハ亦其不快ナル副作用ヲ伴發セザル可カラス沃度亞爾加里ハ管ニ血清内ニ循環スルノミナラズ亦血球内ニ進入スル者ニシテ其之ニ分配セラル、量ハ比較的平等ナリ沃度劑ノ服用後沃度加里ノ最モ多量ニ攝取セラル、所ハ肺臟ニシテ諸他ノ器質ハ其重量ニ適シテ大約同量ノ沃度加里ヲ含有ス

口内ヨリ「ヨヂピン」ヲ送ルキハ速カニ吸收セラル、モ亦

比較的早く沃度ノ排泄セラル、ヲ見ル

口内ヨリ「ヨヂピン」ヲ送ルキハ血清及遠隔ノ器質内ニ沃度亞爾加里及沃度脂肪ヲ證明ス可シ血球内ニハ只沃度加里ノ進入スルノミナリ器質内ニ在ル沃度脂肪ハ甚ダ速カニ(二十四時間内ニ)沃度亞爾加里ニ變化セラル只生理的ニ脂肪ヲ存スル組織(肝、脂肪組織、骨髓等)内ニ於テハ沃度脂肪ハ長ク沃度亞爾加里ニ變化スルコ無シ

吸收セラレタル「ヨヂピン」ハ體內ニ於テ全然消費セラル語ヲ換ヘテ云ヘバ沃度亞爾加里ニ變化セラル而シテ沃度脂肪ハ尿中ニ排泄セラル、コ之レ無シトス

「ヨヂピン」ノ注射後ニハ既ニ少時間ヲ經テ血中及尿中ニ沃度亞爾加里ヲ證明ス而シテ注射休止ノ後モ尙ホ數ヶ月(時トシ一年以上モ長ク)血中ニ沃度ノ循環スルヲ見、從テ亦其尿中ニ排泄セラル、ヲ見ル

「ヨヂピン」注射後血中及遠隔ノ器質内ニハ只極メテ少量ノ沃度脂肪ヲ證明スルノミ

尿中ニ沃度ノ排泄セラル、ハ沃度加里服用ノ後モ又「ヨ

「ヂピン」ヲ與ヘタル後モ只有機性ノ形狀(沃度亞爾加里)ニ於テセラル

「ヨヂピン」ハ沃度加里ノ代用品ニ非ズ只長ク沃度ヲ體內ニ送ルニ當リ不快ナル副作用ヲ起スヲ無キヲ以テ沃度加里ヲ補佐スルニ便宜ナルノミ (南溪抄)

○珈琲涅及「テオプロミン」ノ分離

并ニ定量ニ就テ

(Zeitschrift für analytische Chemie,

1903, 2, Heft.)

Heinrich Brünner 氏及 Heinrich Lein 氏ノ報告ニ依レンハ該兩亞爾加魯乙度含有ノ物質(例ヘハ珈琲、「コラ」、柯々阿、「マテ」(バラケア茶等)ニ五百立方「センチメートル」ノ水ヲ加ヘ蒸散スル水分ヲ補充シツ、半時間煮沸シ其溶液カ無色ヲ呈スルニ至ル迄之ニ少許ノ新ニ沈降ニヨリ製シタル合水酸化鉛ヲ加ヘ次テ尙十五分間煮沸セル後之レヲ濾過シ其殘留物ヲ尙二回五百立方「センチメートル」ノ水ヲ以テ浸出シ茲ニ得タル濾液ヲ約半「リートル」ニ至ル迄

蒸發シ其沸騰溶液中ニ炭酸ヲ導入シ溶存セル鉛ヲ沈降セシメ次テ茲ニ生成シタル炭酸鉛ノ沈澱ヲ濾別シ濾液ヲ水浴上ニ於テ海砂ト共ニ蒸發シ得タル殘渣ヲ「ソツクスレツト」氏裝置内ニ於テ六乃至八時間依の兒ニテ浸出シ其依的兒分ヲ揮散セシメ殘渣ヲ三回五十立方「センチメートル」ノ水ヲ加ヘ煮沸シ次テ攝氏五十度ニ冷却シ冷后濾過シ濾液ヲ蒸發シ八十度ニ乾燥スベシ然ルキハ兩亞爾加魯乙度ハ白色ノ灰分ヲ含有セザル物質トシテ得ベキモノトス

今兩亞爾加魯乙度ヲ分離センニハ先ツ兩混合物ノ熱水性液ニ硝酸銀ヲ加ヘテ沈降セシメテ其沈澱ニ二乃至三立方「センチメートル」ノ安母尼亞水ヲ加ヘテ再ヒ溶解セシメ次ニ該安母尼亞ヲ驅除センカ爲メニ塵芥并ニ光線ヲ遮リツ、陶製蒸發皿中ニ該溶液ヲ溫ムルニアリ爾後其溶液ヲ三十度ニ冷却シ沈降セル「テオプロミン」銀ヲ豫メ秤量セル濾紙上ニ採集シ洗滌シ百度ニ乾燥シ $C_4H_4AgN_4O_2$ ノ記號ニヨリ「テオプロミン」ヲ算出スルニアリ

咖啡混ノ定量ニ際シテハ「テオブロミン」銀ノ沈澱ヲ濾過シ得タル濾液ニ食鹽ヲ附加シ更ニ濾過シ濾液ヲ水浴上ニ蒸發シ茲ニ得タル殘渣ヨリ咖啡混ヲ依的兒ニテ浸出シ其依的兒分ヲ蒸散セシメ殘留セル亞爾加魯乙度ヲ百度ニ乾燥シ秤量スルニアリ (謙中抄)

○堀里設林中ニ於ケル砒素ノ檢定

(Zeitsch. f. analyt. Chemie, 1903, 2. Heft.)

Paul 及 Cowley 両氏ハ Gützeit 氏法ノ改良法トシテ次ニ掲クル方法ヲ賞用セリ即チ可檢堀里設林ノ二立方「センチメートル」ヲ長試験管中ニ取り之ニ五立方「センチメートル」ノ稀鹽酸(HCl)及「グラム」ノ純亞鉛ヲ加ヘ次テ其試験管ヲ豫メ濾紙ニ約二滴ノ昇汞液ヲ以テ浸シ且ツ之ヲ乾燥セシメタルモノヲ以テ管口ヲ掩フニアリ若シ砒素ノ存在スルアレハ其紙片ニ黃色ノ斑点ヲ生シ漸次暗色ヲ呈スルニ至ルベシ其際紙片ガ十五分後變化ヲ呈セザレハ該堀里設林中ニハ實用上砒素ヲ含有セザルモノト証明スルニ足ルベシ而シテ若シ試験ニ使用スベキ亞鉛中砒

黃ヲ含有セル場合ニアリテハ其可檢液ニ亞鉛ヲ附加スルニ先立チ豫メ少許ノ澱粉液及沃度丁幾ヲ加ヘ微ニ青色ヲ呈スルニ至ラシムベシ Diebold 氏ノ經驗ニ依レハ沃度ノ附加ニ際シテハ注意ヲ要スベシト、何トナレハ沃度ノ附加ラシテ多量ニ失スレハ砒化水素ノ構成ヲ障碍スレハナリト (謙中抄)

* * * * *

漫 録

○醫學博士木村孝藏先生の經歷(承前)

醫學科 四年級 羽根田信次稿

○北陸の地。金澤の市。當時吾人の注意を要求する事も大なる人は誰?

○云ふ迄もなく無く校院長を拜命せる木村先生なり。落魄不遇より順境に轉化せる年少多角のの木村先生なり。

明治十六年。絶大の希望を懷いて任地に來れる先生の雄心勃勃。病院の山前にあり攀登何かあらん。學校の岸前にあり逆流何かあらん。一舉手以て病院の改革を遂げん。一投足以て萬民の仰慕を待たんと。歷々勝算を指點せる任地の木村先生なり。

○然も好事魔多き世に嵐は花に吹く。先生の胸算は全く雲に蔽はれて。待て共先生の治療を信賴する病客到らず。さりとして病院の改革は知事の採る處とならず。先生をして失意磋砣。轉た「湘東行人長嘆息」を呼ばしめたる任地の木村先生なり。

○然も先生の血の涙の碎けて玉と騰りたる丹心は。其職を賭して校院の爲に争ひ。其落魄を甘して患者の爲に闘ひ。終に金澤病院の前途をして真如の光を放たしめ。満都の士女をして驚く可き手術に馥郁の香を浴せしめたる當時の木村先生なり。

○然も再轉時勢の進運は歩一步。北陸の野に宏壯たる高等中學醫學部の建設となり。先生の敏腕誠實は。共に校

院長の就職を強ふるに至れる當時の木村先生なり。知らず先生の將來は如何よ。

○諸君。乞ふ暫く筆を轉じて予をして「校院外の木村先生を語らしめよ。思ひ起す先生をして今日あらしめたる。慈父母の安否如何。親を思ふ心は勝る親心の。生れて呱呱の聲を泣き。泣けり懐け。己は這はば立たんを欲し。

己は立てば歩まんを欲し。己は歩めば語らんを欲す。己に長して大學の遠征となり。慈父母の痛心は曩日の比も非らず。風も雨も懷を遠征の孤客も寄す。試験登第の報至らば。却て父上より過度の勉學の攝生上戒慎有之べく候。身の不遇落魄の報至らば。直に母上より浮世の事凡て約束事に候へばさのみ心痛致すまじく候。どの御紙面。成功も憂ひ。失意にも愁ふ。昨夜端なく愛兒の好運を夢む。却つて思ふ之れ逆夢に非らざるか。今朝鳥聲啞々として悲し。遙に腦む游子今逆運無きか。噫此慈父母の一憂一喜は。如何に先生の成功に關して至大の反響を與へたるや。先生の胸底深く其慈恩を徹底して。仰俯誠實。

父母の爲には、凡てを犠牲に供し。赤心昭々として和氣霽々。少く共團欒たる「家庭の摸範」を示して。萬人の贊賞を博せし者故、無き非らざるなり。

○祇園精舎の鐘の音に無常の響あり。生者必滅の習は先生の家を犯し。金澤赴任の翌年。狂雨俄々枝を折り。先生の慈父は五十三歳を以て。空しく昔下一片の烟と化し賜ひぬ。先生の傷心男泣と云ふ事初めてなせりと人々告げられたり。爾來母上に仕ふる事孝行昔々倍すと。今年齡古稀を達し。朝夕愛兒の俯仰を心から喜び賜ふとぞ。

○先生嘗つて馬を愛し。讀書の餘暇郊外に駆けて頗ぶる得色あり。悲ひ哉馬上の若殿。未だ馬術の奥蘊を研めず。偶々峻坂に來りて突然馬が一躍して殺奔疾雷の如し。若殿周章綱を弛緩すれ共。天呼び又猛りたる馬は躍動上下あり。俄然馬上の主を大地に投げて狂奔せり。即夜母上憂色あり。云ふ迄もなく愛兒の乗馬に就てなり。先生爾后復馬に乗らず。蓋し落馬を恐怖するの爲にあらず。母上の憂色に恐怖せるなり。

○先生頗る書生を愛す。嘗て當時の學生三四名を寄宿せしむ。教養嚴戒到らざるなし。書生亦慈父の如く信頼す。一日卓を圍みて夕餉を共にするの時。偶々先生と書生の食物異なれり。先生沸然色をなして下婢を叱して曰く。書生と予と何等の差等あらん。昔は予も亦書生なりと。婢恐惶。書生亦恐惶。噫身顯榮に上りて。然も其行爲は洒然として一寒の書生を學ぶ。其高操の超然たる眞に先生の一美話たるを失はず。

○先生忙中の閑あり。好むて圍碁を争ふ。一日又一夜。偶々爲に勉學の時間を侵すを悟り。慨然嗟嘆久ふして謂つて曰く。「予は誤てり予は誤てり」と。直に凡ての器具(碁に要する)を十全會に寄附し。爾來讀書を友とし更々顧みず。之れ些事なりと雖も、儒夫薄志の徒の到底行ひ難き事なり。吾人は先生が學事に忠實なる事を知ると共に。萬人の行ひ難きを敢て行ふの豪傑なりと信ずる者なり。

○先生讀書の餘暇心を体育に注ぎ。劔を石川先生に學び。弓を楠先生に習ふ。稍其道に入り要領を得たり。偶々劔

道大會を校内に擧ぐ。來賓某君先生の傍にあり。新調の物の具を携へたる先生に云つて曰く、「乞ふお手並を拜見せん」。先生莞爾として應ふるに、「誰れも相手になりませ

ん」。某君陰に舌を巻いて想はらく。何時の間に斯くは上達せし事よと。蓋其妙技取て儻輩の敵し得ざるなりと想見せしなり。焉ろ知らん先生の劍道は未だ其域に達せず。大會の番附にならぬ劍道なり。敵は孰れも剛の者。誰一人先生の相手になれぬ劍道ならんとは。某君後に聞きて苦笑久し矣。然れ其後大に熟達せりと聞く。

○一日先生を訪ふて遠來の友到る。平素先生との交誼蜜の如し。先生乃ち歡ひ迎へ。久潤千言談泉の如し。日將に暮れ。佳肴綠酒席に出て、獻酬交互逸興益々加はる。且語り且飲み。然も主客尙酒を求む。短垣より流れ出づる潤水。庭内響淙々として絶えず。卓を擁して黥飲深更に至り。終に半斗の樽を傾けて止む。家人怪訝且驚愕す。蓋先生の平生。未だ一度も觴を手にせし事を見ず。先生は酒が呑めぬ事と信せしなり。さりとは訝しの限りと

て。翌朝母上の尋ね賜はるに。先生洒然として曰く。兒平生不鳴不飛鳴乃驚人矣と。問者語無し。先生大笑す焉。

○先生元來の天性。胸裡一個の獨見を固定するや。縦横の障害來るも敢て動かず。少く共先生已往の落魄不遇も之が爲のみ。然も今日の顯榮大成も亦之が爲のみ。死生窮達を以て。其確乎たる獨見を空しふせる所。乃ち先生の先生たる所以乎。一小話あり。先生東京に於て。一日知己淺田氏川原氏と相携へて上野に遊ぶ。之より淺草に赴かんとす。川原氏云く。此道は迂回せり遠き事甚し。乞ふ乙の道を進まんと。蓋し先生は甲の道を近しと信ずるなり。忽ち之を遮りて云く。川原氏未だ此道を知らず却て遠き道を求めて行くか。乞ふ甲の道を進まんと。川原氏聞かず。先生亦聞かず。甲遠し。否乙近し。顔面潮紅靜脈怒張。兩虎辨論相爭ふて下らず。擾々の極終に道を別れて進むよ決し。二英雄意氣卓勵。淺田氏を捨て、疾風の如く去る。云ふ迄もなく淺草の門に出合ふ約束な

り。迷惑なると獨り淺田氏なり。氏も終に新に丙の道を取つて進めり。慮はざりき。先着第一の勇士は淺田氏ならんとい。而して第二着は木村先生に非らざるなり。川原氏の得意思ふべきなり。

○先生を以て天運の寵兒なりと云ふ者は。毫も先生を知らざる者なり。先生を以て熱心なる勉學家なりと云ふ者は。眞に先生を知れる者なり矣。先生終日營々として校院に怠らず。孜々として患者に執り。日々家に歸るは夕陽西に傾くの刻なり。乃ち校院を辞して後。靜に校内の自修室に籠りて屹々書を探る。先生曰く。家に歸れば來訪の客あり。家庭の繁務あり。校内の自修室の靜閑なるも若あずと。噫。怠惰予の如きは。制限せられたる學校の時間さぬ。早く過ぎよと待つものを。放課後の勉強など夢にも思はざるなり。唯戒愼恐懼して此事を味わむのみ。

○聞け。尙一語の記すべき事あり。校内自修室より歸宅せし先生は。知らず何事をか。團圓たる家庭に卓を

圍みて。且語り且喰ひ。食后一時間。手紙。新聞。日記。あらゆる雜務を整理し。直に去つて書齋へ退き。復讀書に耽りて他事を顧みず。汲々研鑽して午后十時。尙燈火書窓を輝けり。學理の趣味津津。十一時尙書齋へ聲あり。十二時尙寝ねず。一時到る尙寝ねず。二時に到りて漸く寢に就く。雖股繩頸の精勵。然も十數年來一日の如し。恰かも人をして其信偽を疑わしむ。噫。學海の風濤は荒し。堅忍なる者之を超ゆ。苦學の困難は堅し。精勵なる者之を貫く。先生の堅忍。先生の精勵。眞に之れ千金の立志談。先生が歴史を飾る凡ての中。最も大なる内容たり焉。

○艱難は免る可からずと自覺せよ。而も艱難の后には必ず安慰ありとの教訓は。木村先生に依りて授けられぬ。然り先生幾多の堅忍と精勵との苦艱は。正しく夥しき安慰を持ち來しぬ。六尺の自修室に立籠れる先生。氣は張弓の天下醫學の大勢を觀望して陰に其機を待てり。蛟龍尙未だ池中に潛むの時。雲一度來らば。忽ち天に騰らん

とす。

○積りたる雪の中より。寒紅梅の一二輪咲き始めたる。感慨限りなく深し。今や先生。堅忍苦學の自修室より出て。世界の自修室に花を觀る事とはなりぬ。明治三十年八月。文部省は。先生をして外科學研究の爲。滿二年獨國に留學を命ず。艱難の雲風に拂はれて月圓々。安慰の花春に遭ふて香馥郁。木村先生の前途亦多望なる故。○金碑一個。時計鎖(金と白金にて作れる)一個。千圓の慰勞金。之れ先生の遠征を送らむが爲。學生より。知友より。弟子より。校院より。捧げしなり。先生の歡びと感謝と。血の心より湧き出でつ。横濱を捨て、蒼波千里。故郷遠き波の上。起き臥し明す旅衣に。母上の安否を涙と込めて。彼地に着さぬ。

○留學中の先生。遙に門下生を教ねて曰く。(手紙の一節)

(前略)目下學校休中なれ共。外科に通ひ居り候が。外科の事に付ては。表面上の事丈は僕が恐ろしく思ふ人も無き様なれど。伯林の學者は悉く自分の學領(Auto-

三三三)を有する故に意張り居り候。僕も將來は只此學領を作る事に盡せんと思存候。然らざれば吾國醫學の進歩せる事を他國人に示すの方法一つも無之候。自己の學領あれば之れ學界一國の君主なり。他人の犯す能はざるなり。當地にて泌尿器專家等の許に度々行きしが。毎日なす仕事の有様ハコレデモ獨乙の専門家かと思ふ程につまらぬ事もあれど。學領を有する彼は一國の君主の資格ある故。其前には敬服するの不得止有様に候。中にはブーボーが一つ切れぬ君主も有之候。僕等は今日迄まだ足らぬくで奮勉強を致し候。病人に取りて之幸福もあらんか。自分と取りては大なる損なりし。諸君も之等の点を充分會得して御研究あらんことを希望す。

諸君は研究上に付而は。第一獨逸語。第二一定の學領を作る事に全力を尽し被下度。當地一耳鼻科の専門家にて澤山の仕事を新聞雜誌等に盛に出して居る者が。耳のカテーテルを満足に通せぬと云ふ人が有之候。

伯林の學者と雖も何でも會得し居る次第には無之候。併し當地の學者か其基礎を確實に堅め候事は實に敬服に有之候。例令己れ天晴の教授にならんと決心する人は。先づ助手になる前に外科専門なれば解剖に二三年(勿論ドクトルになりしのち)病理にも二三年細菌學にも一年化學にも二年と云ふ鹽梅にて。漸く外科の門に入る事故。大なる仕事の出来るも不思議には無之候。云々。

○先當初より。基礎醫學を主として研究せんとし。伯林に行きて直にウイルヒヨウ先生の教室に學び。病理解剖學を修め。次でベルグマン先生の外科臨床講義に力め。翌年フライブルヒに行きて。佐多先生と共にチーグレル先生の教室に學び。其他コツヘル。クラスチアルンス。カスペル。ウラルフ。ホフワ。シヨツテリウス。カボジ。等の諸先生に就て得る處あり。ウキンナに於て外科のアルベルト。グツセンパウエル先生授けられ。多くは半年。數週。數日。諸々の病院を見。學校に行きたる事

無數。早くも二年の歲月は。矢の如く經過しぬ。

○木村先生の風采。蓋し清洒たる威容。秀眉眼清くして。頭髮の漆黒と相應じ。姿勢優美よして嚴正。然も不似合ならざる萎小の体軀。大男の夫に比して智神の抱滿を表はし。侵すべからざる好個の偉丈夫。而も毛唐人中の頼珍漢は。應々先生の年少を侮りて。無禮を云ふ事少からず。更に先生の一度口を開き。一度行を示すに至りて。彼等驚愕恐懼の醜体を演ずる事每常なりき。

○あられの音に夢破られ。雲間に有や氷るらん冬の。明治三十三年十九日の夜。万里の蒼波を蹴つて今港につきたる巨船一艘。清光婆沙として波を照す。乗せたる船の主や唯……………願れば木村先生。當時故郷遠き波を距て。獨孤天涯の客となり。鐘聲暮を報じては。母上の今恙なきやを懷ひ。校院はいかに。弟子はいかに。征衣を濡らす伯林の雪。巴里の月。焉々胸に彫まる、無文の悲歌ならざるべき。然も此裡にありて切磋琢磨の精勵は。超然儕輩に一頭地を抜き。偉大なる内容を腦に藏して、

此夜此港に着きたるなり。

○急報至る。先生歸朝の急報なり。ある者は横濱に。東京に。さては福井金澤に。歡迎の聲と萬歳の響は。凡ての混雜の調和なりき。知己朋友弟子學生等相呼應して無事を祝し。此壯圖を迎ふるに。一、金屏風一對。一、狩野周信画の三幅對の軸を送る。先生歡極つて語なし。蓋諸君の丹心より作られたる結晶を贈られし爲なり。

○折も折。復急電到る。何事ぞ。吾文部省は。先生歸朝の旬日を出てづして。先生に「醫學博士」の學位を授けらる。噫。雪の朝に眺めやるとも。春來ねば櫻の花も見むわかじ。先生が往昔の苦學。只一個の自修内の人たりしも。今や春來つて東風桃李。君勿し訝大器晩成の語。眞に吾人を僞らず。吾人敢て云わず。敢て云わず。

○獨逸土産とは何者ぞ。石川縣教育會よ於ける先生の土産なり。前後三時間に渡る大演說。爽快なる雄辯と。巧妙なる論理と。加ふるに誠實なる觀念の綜合せる演說なり。滔々説き來り喝采湧くが如し。(此演說の内容は彼地

の狀況を詳知するに極て便なり。且彼地に航せんとする者の熟讀せば以て大に益する處あらん。(石川縣教育會雜誌第十二號第十三號參照)

○先生の演說は非凡なる修辭の方あり、其巧みよ反語を使用して。説く所の主眼を椰揄抑揚する處。巧みに勁敵を樞紐に覆へして。論理を解説する處。最後に説くを抱圍して。自説の運命を躍如たらしむ處。井然として鑿々憑據あり。故に聞者敬服す。蓋獨り演說のみよ於て然るにあらざるなり。クリニックに於ても然るなり。講義に於ても然るなり。座談に於ても亦然るなり。

○歸朝前の先生。門を叩きて宅診を乞ふ者あり。先生聞かず乞ふ病院に行けど。一日知事の家族來る。先生敢て聞かず乞ふ病院にて診せむと。蓋し先生の宅診をなさざるや。病院の患者之が爲に減するを慮ふてなり。歸朝後の先生。宅診を乞ふ者織るが如し。先生亦敢て聞かず乞ふ病院に來れと。然も日々煩に耐えず。先生一策を案じ。玄關に大書して曰く。「宅診希望者は診察料金拾圓也」と。

○先生常に病院にありて。左右を戒めて曰く。諸君若し火災等の犯す急時ある時は。高價の器械も藥品も顧るに足なす。唯最も要とするは患者の経過録なり。之を失はば。己往の研究も水泡とならん。以後先生の経過録のみは。丈夫なる箱に貯藏せらるゝ事となれり。

○古人教へて曰く。其人を知らずは其友を見よと。蓋し先生の尤も親炙せらるゝ友は。川原汎氏。佐藤三吉氏。佐多愛彦氏。山根正治氏。隈川宗雄氏。淺田決氏。北里柴三郎氏。小倉開治氏等なり。之等の諸君が現今醫界の大星たる事を知る者は。以て先生の偉人たる事を首肯し得む乎。

* * * * *

○明治卅五年十二月二十四日。風寒ふして哀猿三更の夢を破る。何事ぞ。悲報あり。忽焉天の一方より。木村先生轉任の報を齎し來りぬ。噫。二十年來恰も其半生を吾校院に經營し。此裡の流離消長は。克く數百の門下生を

して。名譽ある得業士の學位を授けられたる恩師に非らずや。病院を救ひ。學校を興し。今の學生に苦學と堅忍の實例を示して。大丈夫の不遇落魄は敢て憂慮すべからずとの。大なる教訓を教へられたる慈父に非ずや。人誰が哀別離苦の涙無からむ。今や先生去つて金城の春寂寞。血に泣く杜鵑の一聲。浪波の都に影をかくしぬ。怪む勿れ生等亂離啼噓の紅涙。

○明治卅五年十二月廿四日は。滿都の市民……校院の子弟等が。一種悄然たる觀念を以て。他の月。他の日と區別する日なり。少く共生等の胸底に彫みたる。先生離別の感情と綜合する紀念日なり矣。

○予は未だ學者紳士なる語の意義を十分了解なる者にあらず。然も予が腦裡に映ずる學者紳士の意義を以てせば。先生が二十年來の經歷に於て。益々學者紳士たるの品性を仰慕せずむはあらず。學者の意義多岐なりと雖も。然も若し顯榮に媚ず。逆境に惑はず。金帛其心を乱さず。名利其心を壞らず。百千の情緒を排して。銳意精勵。學

事に研鑽する者を以て。學者なりとせば。木村先生は確に眞乎の學者ならず。紳士の意義廣大なりと雖も、然も若し自ら信じ。他を信じ。人の樂を先づ樂み。人の憂を先づ憂む。家庭にありては孝養深き子たり。愛情厚き夫たり。徳智並び備り。俯して耻じず。仰て疚しからざる者を以て。紳士なりとせば。吾木村博士は確に眞乎の紳士ならむ。

○若し夫れ數百の門下生中。浮噪予の如き者にして。事に當りて少くも持重たらんを期するあらば。これ木村先生に得たる教訓なり。若夫れ暗愚予の如きにして。師を尊敬し。友を敬愛し。事に當りて多少忠實ならんと期するあらば。これ木村先生に得たる教訓なり。青年は敢て拮据勉せよ。極端に云へば死を賭して精勵せよ。其誠實に至りては瞬時も離るべからず。第一誠實。第二勉強。第一勉強。第二誠實を忘るべからずと。實にこれ木村先生に得たる教訓なり。

○先生去る。然も生等の腦裡に印したる先生の感化は去

らざるなり。先生在らず。然も吾人の先生に得たる教訓は。永久の寶庫として腦底に存するなり。先生今や語らず。然も先生の經營に基ける校院は。益々其旺盛を告ぐなり。先生研學の爲に笑つて去る。生等泣いて此處に留る。然も此不幸を救ひ。大なる恩惠と慰藉とを與へらる。後任の恩師。宮田篤郎先生なり。生等謹而教を仰がんとのみ。噫。先生去る。先生去る。木村先生の半生。追懷し來れば快き悲哀にして。悲しき快樂なり矣。

○諸君。冷靜なる文字は。二十年來の木村先生に。何をか示す。官途の經歷を左よ記さむ。

- 明治七年九月 東京大學醫學部ニ入學
- 全十六年三月 東京大學醫學部卒業醫學士ヲ受ク
- 全年五月 任石川縣金澤醫學校一等教諭
- 全十八年十月 石川縣金澤病院長申付ラル
- 全二十年 任第四高等中學校教諭叙奉任四等
- 全二十三年十月 任第四高等中學校教授叙奉任四等
- 全 第四高等中學校醫學部主事ヲ命ズ

全 十二月 叙正七位

全 廿四年一月 陸叙奏任官三等

全 十二月 叙從六位

全 廿五年十一月 依願第四高等中學校主事ヲ免ズ

全 廿七年九月 陸叙高等官四等

全 十月 叙正六位

全 三十年八月 外科學研究ノ爲メニケ年間獨國留學

ヲ命ス

全 卅一年十二月 叙動六等授瑞寶章

全 卅二年十二月 獨國ヨリ歸朝

全 卅三年一月 陸叙高等官三等

全 三月 叙從五位

全 卅五年十二月 大坂府立醫學學校教諭ニ任ス

* * * * *

題して木村先生經歷談と云ふ。一枝の秃筆を以て。猥は此文を草す。全篇綾層の斷案

なく。緻密の觀察なく。却て先生の洪徳を傷るの大なる事を恐る。初め知友有壁諸君と約して曰く。乞ふ予は直騰一部の木村先生を傳へん。君は精透全般の木村博士を寫せと。約成る焉。然も予の文全く失敗す。今後只夫の流麗たる艶腕に依て初めて全きを得む。次號よりは雄漂なる先生が經歷。有壁君の健筆に依て紙上に躍如たらむ。筆を投げて敢て讀者諸君に告ぐ。

* * * * *

會報

○叙任及辞令

石川縣立第一中學校醫 白井 精一

依願學校醫囑託ヲ解ク

(二月十七日、石川縣)

金澤醫學專門學校教授

大西 克孝

地方衛生會委員ヲ囑託ス

石川縣金澤病院醫員

白井 精一

依願職務ヲ免ス

(二月三十一日、石川縣)

深美 貞之助

石川縣立第一中學校醫ヲ囑託ス

年手當金百圓給與

(二月一日、石川縣)

金澤病院長囑託

佐々木 達

各 通

金澤醫學專門學校長兼教授

高安 右人

金澤醫學專門學校教授

小川 勝陳

石川縣金澤病院院長ヲ囑託ス

年手當金四百圓下賜

金澤醫學專門學校教授

大西 克孝

石川縣金澤病院醫長ヲ囑託ス

年手當二千圓下賜

金澤醫學專門學校教授

下平 用彩

各 通

金澤醫學專門學校教授

宮田 篤郎

石川縣金澤病院醫長ヲ囑託ス

年手當金四百圓下賜

(二月三日、石川縣)

石川縣立工業學校教授ヲ囑託ス
月手當金拾圓給與

(二月四日、石川縣)

中屋 重樹

依願職務ヲ免ス

(二月十六日、石川縣)

石川縣金澤病院醫員

吉田 幡誠

學術上取調ノ爲メ大坂市へ出張ヲ命ス

(二月十六日、本校)

教授

石川 喜直

叙從六位

止七位勳五等

野口 詮太郎

叙正七位

從七位

小林 茂

叙從七位

正八位

國分 金城

叙從七位

正八位

安村 順吉

叙從七位

正八位

橋本 監次郎

(二月二十日、宮内省)

石川縣金澤病院醫員ヲ命ス

春日 健治

月俸金拾八圓給與

石川縣金澤病院醫員ヲ命ス

八牧 政孝

月俸金貳拾五圓給與

石川縣金澤病院醫員

八牧 政孝

細菌學研究ノ爲メ六箇月間上京ヲ命ス

(二月二十八日、石川縣)

第十卷雜誌第二十七號

依願內科學及兒科學副手ヲ命ス

(二月二十八日、本校)

春日健治

雇申付

無給副手

島 誠 郁

生理學及細菌學副手ヲ命ス

助教

松田 菊治

教務掛主任兼學生掛庶務掛ヲ命ス

全

福見常太郎

學生掛主任兼教務掛ヲ命ス

全

高柳 鎌次郎

會計掛主任兼圖書掛ヲ命ス

全

永山 一 昌

會計掛圖書掛ヲ命ス

雇

石黑 重義

圖書掛兼會計掛ヲ命ス

全

宇野 益之

教務掛兼圖書掛ヲ命ス

全

中野 鑄太郎

(三月四日、本校)

各 通

金澤醫學專門學校副手

熊澤 清隆

全

谷口 長松

全

吉住 保

石川縣金澤病院醫員ヲ囑託ス

(三月六日、石川縣)

任陸軍二等軍醫

陸軍三等軍醫正八位

池 田 耕

(三月九日、内閣)

物品檢閲委員ヲ命ス

(三月十三日、本校)

教授

高山 基重

宮城縣福島縣巖手縣青森縣へ出張ヲ命ス

(三月十四日、内務省)

内務技師

野田 忠廣

陸軍一等軍醫

岩 田 一

京都帝國大學醫科大學教授醫學博士

鈴木 文太郎

醫術開業試驗委員被仰付

(三月十九日、内閣)

叙從六位

(三月二十日、宮内省)

正七位勳五等

鶴見 金十郎

內科學及兒科學副手ヲ命ス(無給)

(三月二十日、本校)

高田 重忠

任陸軍三等軍醫

中西 政太郎

任陸軍三等軍醫

宮 井 勇

任陸軍三等軍醫

小西 俊三

任陸軍三等軍醫

辻 本 辰之助

任陸軍三等軍醫

眞 柄 佐一郎

任陸軍三等軍醫

酒 井 佐太郎

(三月二十七日、内閣)

石川縣金澤病院醫員

木下 克雄

産婆講習生入學試驗委員ヲ命ス

(三月二十四日、石川縣)

金澤醫學專門學校教授

小川 勝陳

石川縣產婆講習所長兼講師ヲ囑托ス

月俸金參拾圓給與

全

真柄 佐一郎

年手當金百八拾圓下賜

月俸金貳拾五圓給與

(四月十六日、石川縣)

岡島 敬治

石川縣產婆講習所講師ヲ命ス

講師ヲ囑托ス

月手當金貳拾五圓給與

(四月十五日、本校)

石川 喜直

月手當金拾圓給與

叙從七位

(四月十五日、本校)

正八位

石川 喜直

年手當金五百圓下賜

石川縣金澤病院院長囑託

高安 右人

年手當金百八拾圓下賜 全

調劑所長囑託

櫻井 小平太

叙正六位

(四月十日、宮内省)

從六位

下平 用彩

各通

熊澤 清隆

叙正七位

(四月二十日、宮内省)

宮田 篤郎

各通

吉住 保

叙正七位

(四月二十日、宮内省)

宮田 篤郎

石川縣金澤病院醫員ヲ命ス

叙正七位

(四月二十日、宮内省)

宮田 篤郎

月俸金拾八圓給與

石川縣金澤病院院長囑託

佐々木 達

叙正七位

(四月二十日、宮内省)

宮田 篤郎

京都府及大坂府へ出張ヲ命ス

(三月二十七日、石川縣)

津川 恒

叙正七位

(四月二十日、宮内省)

宮田 篤郎

東京府へ出張ヲ命ス

石川縣金澤病院醫員

津川 恒

叙正七位

(四月二十日、宮内省)

宮田 篤郎

東京府へ出張ヲ命ス

全

沖野 彌一郎

叙正七位

(四月二十日、宮内省)

宮田 篤郎

(四月一日、石川縣)

津川 恒

叙正七位

(四月二十日、宮内省)

宮田 篤郎

月俸金四拾五圓給與

石川縣金澤病院醫員

津川 恒

叙正七位

(四月二十日、宮内省)

宮田 篤郎

月俸金四拾圓給與

全

沖野 彌一郎

叙正七位

(四月二十日、宮内省)

宮田 篤郎

各通

田中 一次郎

叙正七位

(四月二十日、宮内省)

宮田 篤郎

各通

竹多 乙三郎

叙正七位

(四月二十日、宮内省)

宮田 篤郎

全

田中正一

叙正七位

(四月二十日、宮内省)

宮田 篤郎

依願石川縣金澤病院院長囑託ヲ解ク

石川縣金澤病院院長兼醫長囑託

佐々木 達

石川縣金澤病院院長兼醫長ヲ囑託ス
高安 右人
石川縣金澤病院醫長囑託
年手當金七百圓下賜
(五月十六日、石川縣)

○會員動靜

- ▲高安右人氏 本會々長たる同氏は四月十七日校長會議の爲め上京せられ會議結了後京都帝國大學醫科大學及岡山醫學專門學校へ教育上視察として出向せられ客月四日歸校せられたり
- ▲櫻井小平太氏 本會副會長たる同氏は在東京の母堂病氣看護として三月廿九日より歸京の處母堂には遂に四月十九日死去せられ引續き忌引中の處全三十日歸校五月一日より出校せられたり
- ▲小川勝陳氏 本會理事たる同氏は春季休業を利用し出京せられたるも直に歸校せられたり
- ▲下平用彩氏 本會雜誌部長たる同氏は春季休業を利用し學術視察の爲め三月廿七日出發上京四月十二日歸校せられたり
- ▲佐々木達氏 本會講話部長たる同氏は京都に開會の日本聯合醫會へ列席の爲め三月廿八日當地出發四月二日歸校せられたり
- ▲津川恒氏 特別會員にして金澤病院内科醫員たる同氏は四月一日學術視察の爲め上京を命せられ歸途大坂を経て歸院せられたり
- ▲沖野彌一郎氏 特別會員にして金澤病院外科醫員たる同氏も學術視察のため四月一日上京を命せられ同月十二日歸院せられたり
- ▲米澤恭次氏 特別會員たる同氏は先般眼科學研究として出京せられたり
- ▲藤原敏夫氏 特別會員たる同氏は先般小濱病院に奉職せられたり
- ▲井原悟氏 特別會員たる同氏は去月共濟生命保險會社醫を辭し自宅に於て開業せらる
- ▲高田重忠氏 特別會員たる同氏は四月初旬より內科學

研究として本校へ出勤せらる

▲桑折直氏 特別會員たる同氏は東京順天堂病院に奉職せらたり

▲神坂勇氏 特別會員たる同氏の先般郷里秋田縣由利郡象瀉町に開業せられたり

▲蓮村外男氏 特別會員たる同氏は先般紐育生命保險會社醫を辭し東京日本支部診查醫に轉せられたり

▲岡島敬治氏 特別會員たる同氏は四月中旬より講師として出校解剖學講義を分擔せられたり

▲渡邊十治氏 特別會員たる同氏は一年志願兵隊隊後東京醫科大學外科科傍觀生として去月より出校の由

▲太田精一氏 特別會員たる同氏は先般若州小濱病院醫員を辭し郷里石川縣河北郡河崎村宇大浦に於て開業せられたり

▲石黒均造氏 特別會員たる同氏は東京永樂病院に勤務せらる、由

▲齋藤義雄氏 特別會員たる同氏は客月大阪生命保險會

社醫として勤務せらる

▲平田一若氏 特別會員たる同氏は鹿兒島市立鹿兒島病院婦人科醫局に勤務せらる

▲吉田幡誠氏 特別會員たる同氏は石川縣金澤病院醫員を辭し長野縣下伊那郡飯田町飯田病院副院長として赴任せられたり

○金澤病院長の交代

昨年春以來山崎教授の後を承けて金澤病院長たりし佐々木教授は今回願に依つて職を解かれたるにつき高安校長は病院長を兼務せらる、こと、なれり

○金澤病院の新築工事

一昨年以來當局者の熱心經營せられつ、ある金澤病院の新築工事は目下精密なる圖案も大抵出來上り既に其一部の新築に取り掛り居る次第なれば來年中には小立野原頭に巖岬たる我が新築病院の聳立するを見るに至らんと云ふ

○石川縣產婆講習所の設立

石川縣にては去る四月より金澤病院内に産婆講習所を設立し小川教授に其所長兼講師を又木下金澤病院醫員に講師を囑托したり

○柔道部記事

寒風肌を裂き積雪數尺人は屏裡燧を擁して惰眠に耽るの時我柔道部寒稽古は一月十一日より開始せられたり研學の暇來り體を鍊る勇士三百然かも勇士等は曉鐘を蹴て寒月を踏むの快なきを恨みき三十日間皆勤の勇士は左に記さむ

- | | | | | | | | |
|----|-----|----|----|----|----|----|-----|
| 釜口 | 長助 | 湯淺 | 啓一 | 山口 | 榮 | 高橋 | 義作 |
| 杉田 | 治十郎 | 籬 | 惠 | 金子 | 精一 | 近藤 | 琢磨 |
| 花岡 | 佐太郎 | 川口 | 賀真 | 吉川 | 孝作 | 事上 | 只次 |
| 辻 | 憲治 | 館 | 昇榮 | 尾崎 | 平吉 | 岡田 | 甚英 |
| 須藤 | 璋太郎 | 橘 | 三九 | 古市 | 勝治 | 堀田 | 圭三 |
| 濱地 | 藤太郎 | 鳥山 | 正影 | 林 | 節雄 | 伊藤 | 顯德 |
| 中村 | 辰八 | 三股 | 梅吉 | 福田 | 四郎 | 小出 | 眞二郎 |

山田伊之助 佐藤 軒二 淺利 義治 高 伊三郎
井上 隼雄 太田 友一 春田久太郎 丹羽 佐忠
二月十四日我柔道部の春季大會を舉行せり龍嘯虎吼勇士武を競ひ技を争ふ亦快ならずや來賓學生數百頗る盛會なりき當日番組は左の如し

- (×は引分、○は勝、第一は石川縣立第一中學校、第二は同じく第二中學校、高は第四高等學校)
- | | | | | | | | |
|----|-----|----|-----|----|-----|----|----|
| 釜口 | 長助 | 湯淺 | 啓一 | 清水 | 末吉 | 辻 | 憲治 |
| 山口 | 榮 | 高橋 | 義作 | 近藤 | 琢磨 | 淺利 | 義治 |
| 杉田 | 治十郎 | 籬 | 惠 | 河川 | 賀真 | 谷 | 民治 |
| 金子 | 精一 | 花岡 | 佐太郎 | 吉川 | 孝作 | 桑島 | 貫一 |
| 尾崎 | 平吉 | 岡田 | 甚英 | 井上 | 只次 | 館 | 昇榮 |
| 森 | 公平 | 池野 | 清政 | 吉尾 | 開道 | 高橋 | 義作 |
| 齋藤 | 賢德 | 須藤 | 璋太郎 | 奈良 | 吉村 | 一馬 | |
| 吉田 | 東秀 | 橘 | 三九 | 鳥山 | 正影 | 節雄 | |
| 濱地 | 藤太郎 | 堀田 | 圭三 | 小高 | 仰四郎 | | |
| 古市 | 勝二 | 堀田 | 圭三 | 林 | 節雄 | | |
- 講道館投之形 (小町 顯德 環 何藤)

○(林) 節雄 利忠 ○(高) 鳥山 正影 ○(高) 中村 辰八
第二(大谷) 石田 濟 ○(高) 加藤鉄之助

○(三) 股梅吉 ○(伊) 勢純一 第二(伊) 勢純一 第二(宮) 川 壽
○(伊) 勢純一 第二(西) 澤 佐吉 第二(宮) 川 壽

高×(福) 田 四郎 第二×(小) 出真二郎 第二×(山) 田伊之助
高(伊) 東 直 第二(由) 尾 正造 第二(棚) 尾 直造

高×(佐) 藤 軒二 高(金) 尾 維敏

六人掛

○(福) 田 四郎 ○(伊) 勢 純一 ○(伊) 藤 顯德 ○(山) 田伊之助
○(野) 村 信一 ○(佐) 藤 軒二 ○(金) 尾 維敏

右終りて勝者には賞品を、寒稽古皆勤者には皆勤証及び銀牌を授與して散會す (董)

○講話部大會

文藝部不振なり講話部不振なりと耳にする久し不幸にして予部會毎に其の眞なるを認めさ其の論題の無趣味なる材料の缺乏せる論鋒の論理薄弱なる中學下級生の講話と比して何れぞ由來辯舌練磨の忽諸等閑に附すべからざる

(會報)

敢て喋々を要せんや然りと雖とも論理薄弱にして無主義世の所謂能辯家も予の欲せざる所練辯の士辯を學んで能なる能いざんば寧默なるに若かず必竟吾人講話部に於て研究する所のもの論旨音調にあり彼の目より智識感情に訴ふる文章と耳より智識感情を訴ふる演説とは其間多少の差異あるも論理的正確を要するとなり諸士は既之れを熟知す知て之を爲さるる勇なきならん乎五月四日我校講話部大會を市會議事堂に於て開く其の學生諸氏の演説譬へ少數と雖とも其構成法に於て多少成效を見る部會の比にあらず予之れよりして本會の隆盛を喜ぶと其早輕潛越の言を謝す聊か教授及び學生諸氏演題の概畧を校外諸君に報せん哉

佐々木部長立て先づ開會の辭を述べ。次で第一席、醫學上の觀察より字列及び國字の改良に及ぶ。速水昇君。開口一番眼の文字は對する關係上より滔々説き來り本邦文字の眼に不適切なるに及論し延ひて學生近視の原理及び統計を示し論し來り論し去り結論として視

野と眼筋の生理的作用上字列を横列となす事及羅馬文字になす事を絶叫せられたり

第二席、化學的周期律を論じて宇宙の「リズム」性に及ぶ。猪飼史朗君。君と化學的哲學的頭腦よりして所謂化學的周期律を以て宇宙の「リズム」性よ此論し哲學者の所謂大我説を搏へ來りて實物質實勢力の關係上より「リズム」性を考証せられたり

第三席、小腸肉腫。小西俊三君。君の腸管に稀有なる肉腫の一例を述べられたり患者は六十四年(?)の男子にして生前下腹部、下肢の痲痺の外腸症狀を訴へざりしと君の先づ腸に發する肉腫の種類、發生年齢男女の關係臨床的症狀療法經過を論じ次で本患者の病理解剖的所見及び標本を示して詳細講述せられたり

第四席、有耶無耶。釜口長助君。君の得意の圓轉滑腕なる口吻を以て其の絶對的なる唯心論を一方より演ぜられたり

第五席、フートルランド、ウインド、フライハイト。眞田

幸平君。君と巧妙なる獨語演説を試みられたり

第六席、醫師の覺悟。村上教授。教授は後進の爲め専門以外の講話を試みらる即ち人生活間最も貴ひ最も重すべき生命。名譽。財産の三者を搏へ來り其の關係を論述せられ次で醫士としても以上三者の忽諸にすべからざる當然なれとも其れ以外尙醫士の生活上最も重すべき學術法律、道德の三者を鼓吹せらる由來醫は病を治すものなりとのみ咀嚼せる不消化醫士、法律的關係を解せざる固陋者流、道德頹敗せる現時の士流(敢て醫のみを云はず)には實々項門の一針なるなからん乎、嗚呼醫權擴張の聲盛なる今日諸子國家の爲め以上三者實踐の覺悟あれ(妄評多弊)

第七席、藥物に於ける吾人の希望。中島誠君。君は熱心に調劑實習を醫科に課せられん事を必用上より論せらる(佐々木部長曰く調劑實習の必用なる言を俟たず然れども其れ以外尙必用なる學術其他の爲め多數の時間を要する今日時間の都合上より之れを廢せりと答辨ありた

り)

第八席、セキイリチー療法。辻本辰之助君。君は學理上より實驗上よりセキイリチー療法の卓越なるを絶叫せられ殊に慢性顆粒性結膜炎。トラホーム、パンヌスに奏效あるを述べられたり。

第九席、獨語朗語。中島誠君。言調明晰聲音院朗君は眞田君と共に新進の士予輩本校獨逸語界の寂寥なる今日に於て有爲の士を得たるを喜ぶ願うは斯道の爲めに努力せよ第十席、薄荷油中に於ける薄荷腦の完全抽出法。高山教授。教授六星霜間苦心經營の結果薄荷油中より薄荷腦の完全抽出法の成効を報告せられたり

第十一席、デイ、ダンクレーデー、ヒュール、デイ、ゲエルター、デイ、ウンス、グロローセー、ガーベ、ゲバーペン、ハーベン。小山田繁三郎君、君が多年研究の獨文學は茲に句々數方言となり發表せられしにあらざるか。

午餐一時間休憩。

第十二席、結核患者の尿中アチエトン排泄並にアチエント檢定新法に就て。上田教授。由來尿中アチエトンを

見るは糖尿中。腸管のアヘクチオン激烈なる時生理的にては蛋白多量攝取の結果其他フェイベルクランクハイト。フングルツースタンドに來る肺結核尿中にも亦見るは既に是認せらる、所なり然して其の理由の詳細報告なきは深く恨みとする所教授は多年研究の結果其の結核患者尿中アチエトンを出すは主にフェイベルある時よして彼のアーベントフェイベルの出づる場合に之尿中之を見る然かも其れ稽留熱ならんか其の排泄愈甚しきを見る之れ其の熱と大なる關係あるなからんか然れども無熱の場合に於て尙之れを見る之れ腸管變化ある場合に於て其の變治まらんか直にアチエトンの排泄を見ず要するに結核患者にありて尿中アチエトンを見るもの之れ蛋白分解の盛なる時起る現象にして結核には些少の關係もなし即ち蛋白分解盛なる時はオキシブッテルゾイレを生ず其の生理的に於ては水と炭酸とに分るゝもの熱ある關係よりして

直ちにアチエトエツメンツヒゾイレーよりアチエトンに變ず彼の結核患者尿中、オキシブツテルゾイレーを見ざる所以なり

アチエトン檢定法に種々ありマレルバ氏メトローデーは液中デIMATEールパラベニールデアミンなき時には赤色となる此の時スペクトールにて檢すれば酸化ヘモクロビント同様なる吸収線を見るにヨードホルムメトローデーあるも其の反應鈍し教授はアチエトンの性狀より研究しアミード化合物を合す時は其の成效するならんかを思ひ偶然新檢定法を發見せられたり然どもヨードホルムメトローデーに比し優劣如何は云はざるも其のアチエトンを明晰に證明し得る一立方センチメートル中〇、〇〇二のアチエトンを明晰に確証し得ると則ちズルホアニリンゾイレー一〇、〇にアンモニヤツク一〇〇、〇を檢液に加へ之れに新製の二%のニトロプロシットナトロン液を加入せは其のアチエトンある場合には液はプルプルロートに變し其の反應は漸々現はれ放置せば消色し酸類に脱色しアンモ

ニヤツクにより再び藍色「スペクトール」又は陰性なり其のヨードホルムメトローデーに比し優る点は唯其の明晰に證明し得るにありと(記者記憶を脱せし所不少誤謬は記者の罪として教授及び見る人了せよ)

第十三席、處女に於ける卵巢肉腫に就て。越野義三郎君。詳細は本誌原著欄内にあり

第十四席、獨語朗讀。柴田順三君。

第十五席、沃度エーテル應用の小實驗。北川健三君。君は沃度エーテルの效用長所を論述せられ二三例を擧げて治験を示されたり

第十六席、結核患者に對する加里石鹼治療小驗。東良平君。君は沃度グリセリンを注入し却て漸々衰弱を來せる結核患者に加里石鹼を應用して治験ありし報告をせられたり

第十七席、聽力検査に就て。熊澤清隆君。得意の獨語にて滔々數方言述べられたり唯制限時間の爲め中央にて中止せられしは吾人共に遺憾とする所

第十八席、肋膜炎穿胸術の適應症、時期、量、位置、後發危險に對

君は肋膜炎穿胸術の適應症、時期、量、位置、後發危險に對する注意及び其の方法を詳細にし治療的價値を述べらる

第十九席、デイー、ユーベルフリック、ユーベル、デイー、ゲシヒター、デル、メデイチーン、ウォールファート先生。譯

文大意は次號に譲る、

第二十席、腎臟結核の腎摘出術。東良平君。君は腎摘出

術の統計より氏か實驗せる二十九歳の女（早産咯血を來したる事あり）よて昨年二月頃より腰部疼痛に伴ふて左

季肋部に腫物（氏か苦心の診斷により其の結核性なるを確めたり）を觸れ漸々増大して兒頭大に至りしものに偏

側摘出術を施し十一日にして第一癒合をなし後十日にして創面平癒したる好果を報告せられたり

第二十一席、フラトリスムス。小川教授

第二十二席、腹内寄生虫に就て。佐々木教授

午後四時三十分櫻井副會長會長代理として閉會の辭を述べられ萬歲聲裡三々五々歸路に途く、當日之雨天なしに

係らず出席者非常に多く教授職員、來賓、醫員、學生五

百に垂んとせり之れ必竟會員諸氏熱誠の至す所なりと雖亦委員諸氏狂奔の勞は吾人の深く謝する所なり（董）

○紀念式

五月十一日我校第二回紀念日に當り午前八時濟々堂に於て式を擧ぐ高安校長の式辭、教官總代としての櫻井教授、學生總代としての四年生小林孝一氏祝辭を朗讀し

兩陛下の萬歲及び金澤醫學專門學校の萬歲を三呼して式を終る

式辭

光陰時ヲ假サス昨明治三十五五月十一日第一回ノ紀念式ヲ擧ゲ年ヲ閱スル既ニ滿一年而ノ本日諸君ト共ニ再ヒ本堂ノ下ニ會シ第二回ノ紀念式ヲ擧グルヲ得タルハ實ニ小官ノ光榮トスル所ナリ蓋前一年間別ニ進歩ノ見ル可キ者ナキノミナズ不肖諸氏ト共ニ正ニ確定シタルガ如ク安心シタル本校新築豫算案ハ議會解散ノタメ水泡ニ歸シ終リタルハ實ニ憾トスル所ナリト雖モ亦著シ

キ異變ナキハ大ニ本校ノ幸福トスル所之偏ニ諸氏カ
勅旨 校則ヲ遵奉セラレ一心以テ學業ニ熱中セラル、
ニ職由セズンバアラズ是不肖右人カ諸氏ニ向テ深ク謝
スル所ナリ希クハ次回ニ於テハ一層幸福アル式典ヲ舉
ケント欲ス聊カ以テ式辭ト爲ス

明治三十六年五月十一日

金澤醫學專門學校長
從五位勳六等 高安右人

祝詞

ケフコ、ニ本校第二回ノ紀念祝典ニ遭遇スルヲ得タル
ハ
上聖旨ノ優渥ナルト諸先生ノ懇篤ナル訓導ニ依ル吾人
學生マタ多ク云フヲ知ラズ唯夫レ喜バシキガ爲メニ祝
ヒ喜ビ金澤醫學專門學校萬歳ヲ三呼セントス

明治三十六年五月十一日

金澤醫學專門學校學生總代

小林孝一

* * * * *

當日は例に依り職員及び醫學科四年生、藥學科三年生よ
り左の寄附ありたり

- 一日章旗 十二旒 職員一同より
- 一校旗 一旒 醫學科四年生一同
藥學科三年生一同

(忠)

○春期運動會

紀念式が濟んで「之から十全會遊技部の方で金石綱引が
あります、それで一言申て置きますが今迄職員諸君の御
出席がいつも少ないのは誠に残念で御座いますから今日
は是非共御出席を願ひます」との校長の慧句から既に十
全會に移つたのである

夏縁初めて齊しくなつた野をうねる細流、水をた、へた
水田、翠色滴る新樹をよりに眺めて馬車の人、走る人、
靴の人、路傍の蝶を追ひつ、行く人、三々五々金石へ行
つて見れば笹色の海水が茫々としてをる、絶代の曲者錢
五の孕まれた地と思へば何となく懐かしくなる、見渡す
限りの白砂の中に獨り他を擡んで臚の方に長方形の船旗

と、ねほ旗小旗とを以て装はれた千石積の和船長吉丸が會場に充てられてあつた、入つて見れば銅褐色の漁翁が少し屈つた背を時々延ばしながら此の船の由來、此の儘ではもう用ひられないと云ふ事、近頃は檢査がやかましくと云ふ事、二度と斯麼船は造られないと云ふことを説き聞かすのである、所が替り／＼に新手が入つて來るので流石の銅色翁もいつか姿を隠して了つたのは愛嬌であつた

會場から、出て濕つた磯風に吹かれながら汀を辿つて逍遙すれば、やはらかな小波の潮に潤ふた貝殻が瑠璃色に輝いて居る、沖には既に數艘の船を借りて漕ぎ出たものもある、今しも後ればせに出やうとした一艘はあはれ河口で顛覆したので這ひ擧つて衣類を乾して居るのは滑稽であつた、長吉丸は教員達が何か頻りよ談笑して居るらしい、簡単な中折帽、一分も動かぬと云ふ山高帽阿彌陀のパナマ、どうでルよと云ふ風又冠る帽子、遠方から見て色々の連想が起つて笑止しくなる、何を話してゐる

だらうと思つて行つて見れば鯨の脊椎を何所からか得て來た校長が庭へ置いて腰を懸けるに妙だと四方から撫て眺めて得意がつてをる、何だ然麼物をと云はん計りの多少負けをしみらしい教授が横を向いて煙草をふかして居つた、先んぜられて残念顔なる梶原教授も居つた、先生之は腰椎のやうですなアと口を出す學生もさすがは其の道の人だけとをかしく感じた

十時、十一時、未だ何等の催しもないので漸くつまらぬ／＼の暇が所々に起り初めた時、網引が初つた、ソレと一度に走り寄つて引け／＼、早過ぎる／＼と妙な木片をチョン、クルリで引くのが中々容易でない、氣早に丸裸になつて潮の中へ飛び込んで獵師に小言云はれて手持無沙汰の人もあつた、然し一網二網獲物は殆んど皆無とは情ない、傍に見て居つた童が今日の日和で獲れやうはないと冷かに評して居るのを聞くも腹立ちである、獲物の中から小鯛を拾ひ出して之も一寸よいものだと思つてやらした先生、平生晚餐の獻立のたしなみも餘程氣取つた

お方ならんと診察がついた

薩摩汁か出来たと云ふので再び會場へ歸へて杓を添へた馬ケツの汁を各自盛つて吸ふのである、立つた儘の人、靴を一方だけぬいた人、笑ひながらの人、すます人、無言で一杯を盡して美味いと亦盛る人、汗拭ひながら水も欲しいと贅澤云ふ人様々である、傍ら薩摩汁の掛りらしい人がお代りを運びながら、もつと醬油を入れたいのだけれど經費が足りないとの聲は悲しげに低かつた、忽ちに彦左衛門の鶴の吸物になるので隣の馬ケツにも手が出るお代りが待ち限れずに茶碗箸御持參で直接釜元迄出陣された勇士もあつた

次に綱引があつた、紅白左右に別れた人の波を例の上田教授ハ髭のある小供になつて勵まして居る大兵自慢の高山教授は長吉丸の舳先に立つて頻りにベルを打つて居つたのが興熟して堪らなくなつたと見ればベルを捨て、日の丸の旗を振り出したのは此の上もない滑稽であつた夕日斜に金波銀波を彩り、藍色の雲が遙に沖の空に棚延

いた時、上田教授の帽が靜かに擧げられて十全會の萬歳を三呼して和氣霽々の裡に散會を告げた(忠)

○醫科二年級々會

五月二十三日濟々堂に於て開く午後三時池田(恒)君開會の辭を述べ次て下平先生級長として同會に對する希望を述べられ高安校長、釜口君、池田(菱)君、村上教授、速見君、小川教授、井上君、福見助教教授相次て茶菓の間演説を試みられ歎湧き興來り尽くる所を知らず晚鴉大手の森に騒ぐ頃愛を割て歸路に就く當日學生出席者の比較的不足なるは予等の怪む所爾來は小障碍は排して出席を切に望む由來我級協和に乏し同會の趣意方法を否定する士何ぞ同級の爲め來りて改革せざる何ぞ來て策を講ぜざる徒らに婦女子の引込主義は男子の欲せざる所なり(董)

○弓術部大會

殘葩地に印し新緑漸く濃ならんとする時我か弓術部は五月三十一日本校々庭に於て大會を舉行せり其日朝來曇雲

四塞雨脚の襲來を危みつゝ、出席したりしに委員諸君の忠實なる式場既に整理しありき一委員曰く本日は譬へ少雨ありとするも延引せず試験切迫の此頃由來斯道に不熱心者多き出席の多數は期し難し若かず晴雨に關せず施行せんと九時半頃集るもの三十、雨脚漸く急なり則ち点取競射、數取競射、二人競射を始む正午よりは各校撰手來賓本校學生も續々來り篠衝く雨に鼓聲矢鳴相和し那須原頭勇士の古を忍ひしめき唯遺憾とするは教授職員及學生の出席者少數なりし事なり之れ雨天の然らしむると雖も亦斯道に不忠實の然らしむるなからんか、嘆又嘆、當日受賞者左の如し

點取競射(五手)

- | | | | | | |
|----|------|-----|----|----|-----|
| 一等 | 五十五點 | 秋山君 | 一等 | 八本 | 笹田君 |
| 二等 | 五十四點 | 島山君 | 二等 | 六本 | 小野君 |
| 三等 | 五十三點 | 笹田君 | 三等 | 五本 | 齊藤君 |
| 四等 | 四十八點 | 齊藤君 | 四等 | 五本 | 中島君 |
| 五等 | 四十三點 | 佐野君 | 五等 | 五本 | 原君 |

數取競射(五手)

- | | |
|------------------------------------|---------------|
| 各級撰手競射(三手) | 各學校撰手競射(三手) |
| 一等 四本 前田君(四年) | 一等 三本 神谷君(四高) |
| 二等 三本 笹田君(二年) | 二等 三本 楠君(一中) |
| 三等 二本 森君(三年) | 三等 二本 山下君(本校) |
| 職員競射(五手) | |
| 一等 八十七點 楠先生 | |
| 二等 四十五點 田中君 | |
| 三等 二十六點 辻本君 | |
| 二人競射勝利者 | |
| 市丸君、小野君、原君、中野君、山下君、佐野君、齊藤君、島山君、新田君 | (董) |

○書籍 寄附

吐鳳堂書店より同店發行のアルベルト氏外科各論(後編第二、第三卷、二冊)及藥理學(後編一冊)を、下平教授より自著の新纂外科各論(前編上卷下卷二冊)を孰れも本會へ寄附せられたり

(通信)

○退會及死亡者

△退會

通常會員

今村喜太郎

坪内 清市

角張

喜一

河野 隆

谷中黎次郎

河原

信次

與鳥山 忠

田島 耕平

横地

靖

△死亡

特別會員

白井 精一

* * * * *

通信

○金子教授の通信

(二月七日ハルレ發
十月全會宛)

拜啓雜誌御送り被下難有久々に諸君の金篇玉章を拜し御近況を伺ひ無上の愉快を覺へ再三繰返し思へす半日の時間を投打申候諸君益御壯健不相變會事に御執掌被成詢に目出度尙斯道の爲め愈御自重有之度祈る處に御座候老生儀爾來至極壯健に罷在候間乍餘事御休神被下度航海中上海沖と地中海にて風波の爲に打激を蒙りし外何等の異

矣

狀も之豫定通十月十三日馬耳塞に安着仕候途次投錨のヶ所は抜目なく大概上陸仕候得共時間の都合に由り彼の釋迦舊跡として有名なるカンデーを見ざりしは終生の遺憾に存候香港碇泊中政廳の委頼に依り殊に研究所より撰拔されたる會員松王數男君の來訪を受け翌日君の研究室を尋ね半日の快談に苦熟を洗ひたるは復た得難き愉快なりし香港の暑氣を紅海よりも強く船室内は實は百〇五度に昇り申候豫て覺悟せし印度洋は九月は一年中の好季節而かも時々驟雨沛來し却て凌ぎ易かりし上陸後馬耳塞に二日巴里に二日伯林に三日滞在の後十月廿日夜當地に安着仕候佛國は耳目不通然かも僅々二三日逗留の事とて何事も暗黒同様と申す外なし併し一見巴里の贅澤なるは實に意想外にて殊に夜分十二時後の繁昌は眼も眩する斗に御座候朝十時前に起床するものハ巴里の資格を欠くなど戲言もあり左れハ放縱淫逸至らざるなく羅馬の二の舞最早亡滅の時期も近乎の感なき能はずと雖も實際を聞けば中々左にあらす諸ゆる好餌を掲げ以て世界の金銀を吸収する術策の巧妙に至ては到底天下に比なしループルは舊王城今之美術館なり規模の宏大財寶の森々なる只驚くのみ奔馬に鞭打底の速力にて半日を費し僅かハ繪畫室を一巡せしまでに御座候佛國否世界美術の淵巢と聞へしベルサイム王宮は巴里を距る二哩斗なれども時間の都合にて

見ることを得さりしは遺憾の事と存候巴里にの年來ホテルを營業せる本邦人諏訪某あり元と軍人にて明治の初年(普佛戰爭の翌年と聞く)我政府より留學を命せられたる人なりしか故あり辭して今の業に轉せし由宿料も比較的廉にして善く萬事に世話し呉れ大に便宜を得申候序なれば一寸茲に宿所御紹介致置申候 Hotel Fortuny (Suvva Hotel), 57 Avenue Malakoff Paris 馬耳寒みは唯一の留學生林庄一なる人あり頗る好才子にして萬事に抜目なき尽力を受け是亦非常の便利を得申候何地に於ても同胞紳士の吝ならざるは喜はしきことに御座候獨逸も對する佛人の宿怒の豫て承知罷在候得共實際は一層甚しき様に覺へ申候車掌の如きは我々外國人ですら頑として獨逸語も應せず謂ゆる坊子袈裟の類乎伯林にてハ山崎兄を非常な煩ごし候君を金澤停車場見送りたるは稍く半歳の前なれども茲又再ハフリドリヒ停車場見し時は實も十年の竹馬を得たる思ありき君は今プラグま在り伯林の三日間滞在致候得共最早道中と云ふ觀念は消滅し何となく將來の計畫等も忙しく其れも落付先ハ伯林と鼻目の間なるハレルなれば隙さへあれば何時ても來觀か出來ると高を括り候事にて何も申上る程の材料なし然るも愈々當地へ落ち著て見れば中々都見物杯ろう旨まく問屋て仰し呉れず御字を冠したる足かなくては何程便利な

る瀟車かあても矢張り乗れず其れて未だ何地へも御無沙汰致居候切當府ハ伯林より急行にて二時間少餘を距たてライプチヒ、エーナ等の三十一四分なり北君ハライプチヒなれば僅三十分を投すれば會へる譯に候得共冠足故に未だ往きもせず來もせず折々手紙を飛りして互に無事を報する位の事に御座候當市は一寸小奇麗なる小都會もて人口十五万市の稍中央に古き源泉あり今尙是より食鹽を製出致居候是る則市名の由來もしてハレルとは元と希語の鹽街を意味する由も御座候又ザール河畔に在るか故もアン、デル、ザールを附し何地とか存せず候得共同名のハレル村と區別する次第も御座候人氣は大都會も比し幾分か質朴の方も見受けらる左れば巴里や伯林の如く密娼か白晝公然徘徊して行人に戯るゝか如き醜體は無御座候大學を Verainigte Friedrichs-Universität, Halle Wittenberg と稱し分科大學は各所に散在し醫科大學各教室は一所も集合致居候解剖學教室は我高等學校の本館と面積大差なかるべく他も地下層丈け餘斗に有之候故先づ彼れの一掃半位地下層には屍室蒸瀦室動物室等を設け隨分便利に出來居り申候院長は Prof. Pock 氏なり氏はドレスデンに長くプロセクトルとして教鞭を取りしか今より八年前此地に榮轉せり器械的發生史を以て自ら一派を樹て隨分老功の人に御座候外科の院長 Prof. Bramann 鼻

(通信)

耳咽の院長 Prof. Schwarze 氏には一面致候得共其他は知らず大學の外裁判所あり兵營あり兵の二聯隊と申す事
 前月廿七日の獨帝の天長節にて當地丈けの觀兵式も一見
 仕候得共二聯隊にしては餘り少き様に見受申候軍規は我
 れの嚴肅なるには遠く及らざるもの如し式場は仕官か
 婦人を携へ居る杯は随分奇觀なりし瓦斯局二給水塔三ヶ
 所電社一電鐵は二會社ありて毎日朝七時より夜十二時ま
 で大低五分時毎に市街を往復す郵便局の頗る立派にて東
 京の本局も是に及はす兎に角殊に交通機關の發達は實
 に浦山しき事に候先は乍延引着報旁如此御座候敬具

二月七日

金子治 老生

Halle a. S., Ulland-Str. 81

十全會御中

* * * * *
 * * * * *

公文

○文部省告示三十號

明治三十三年文部省令第十號及明治三十六年同省令第二號敎定ニ關スル規
 程第五條第一項第一號ニ依り明治三十六年三月一日以後行フ處ノ無試験檢

定ニ關シ指定スルコト左ノ如シ

明治三十六年二月十八日

文部大臣理學博士男爵菊池大麓

學校 卒業
 修了學科

醫學專門學校

藥學科 化學

○勅令第二十六號

(三月二十日官報)

醫術開業試驗委員官制中左ノ通改正ス

第一條第三條及第六條中「内務大臣」ヲ「文部大臣」ニ改ム

附 則

本令ハ明治三十六年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

○勅令第二十七號

藥劑師試驗委員官制中左ノ通改正ス

第一條第三條及第六條中「内務大臣」ヲ「文部大臣」ニ改ム

第十條中「内務屬」ヲ「文部屬」ニ改ム

附 則

本令ハ明治三十六年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

○勅令第六十一號

(三月二十七日官報)

專門學校令

第一條 高等ノ學術技藝ヲ教授スル學校ハ專門學校トス

專門學校ハ特別ノ規定アル場合ヲ除ク外本令ノ規定ニ依ルヘシ

第二條 北海道府縣又ハ市ハ土地ノ情況ニ依リ必要アル場合ニ限り專門學

校ヲ設置スルコトヲ得但シ沖繩縣ハ此ノ限ニ在ラス

第三條 私人ハ專門學校ヲ設置スルコトヲ得

第四條 公立又ハ私立ノ專門學校ノ設置廢止ハ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第五條 專門學校ノ入齋資格ハ中學校者ハ修業年限四箇年以上ノ高等女學校ヲ卒業シタル者又ハ之ト同等ノ學力ヲ有スルモノト檢定セラレタル者以上ノ程度ニ於テ之ヲ定ムヘシ但シ美術、音樂ニ關スル學術技藝ヲ教授スル專門學校ニ就テハ文部大臣ハ別ニ其ノ入齋資格ヲ定ムルコトヲ得

前項檢定ニ關スル規程ハ文部大臣之ヲ定ム

第六條 專門學校ノ修業年限ハ三箇年以上トス

第七條 專門學校ニ於テハ豫科、研究科及別科ヲ置クコトヲ得

第八條 官立專門學校ノ修業年限、學科目及其ノ程度并豫科、研究科及別科ニ關スル規程ハ文部大臣之ヲ定ム公立又ハ私立ノ專門學校ノ修業年限、學科目及其ノ程度并豫科、研究科及別科ニ關スル規程ハ公立學校ニ在リテハ管理者、私立學校ニ在リテハ設立者文部大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム

第九條 公立又ハ私立ノ專門學校ノ教員ノ資格ニ關スル規程ハ文部大臣之ヲ定ム

第十條 公立專門學校ノ職員ノ旅費及給與ニ關スル規程ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ地方長官之ヲ定ム

第十一條 公立ノ專門學校ニ於テハ授業料ヲ徵收スヘシ但シ特別ノ場合ニハ之ヲ減免シ又ハ徵收セサルコトヲ得

第十二條 第一條ニ該當セサル學校ハ專門學校ト稱スルコトヲ得ス

附 則

第十三條 本令ハ明治三十六年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

第十四條 明治二十年勅令第四十八號ハ之ヲ廢止ス

第十五條 既設ノ公立又ハ私立ノ學校ニシテ本令ニ依ルヘキモノハ本令施行ノ日ヨリ一箇年以内ニ第四條ニ準シ認可ヲ申請スヘシ

前項ノ手續ヲ爲ササルモノハ前項ノ期間ノ満了ト共ニ廢校シタルモノト看做ス

第一項ノ手續ヲ爲スモ不認可ノ命令ヲ受ケタルモノハ其命令ヲ受ケタル日ニ於テ廢校シタルモノト看做ス

第十六條 千葉醫學專門學校、仙臺醫學專門學校、岡山醫學專門學校、金澤醫學專門學校、長崎醫學專門學校、東京外國語學校、東京美術學校及東京音樂學校ハ本令施行ノ日ヨリ專門學校トス

○文部省令第九號

明治十六年太政官布達第三十四號醫術開業試驗規則中左ノ通改正ス

明治三十六年三月三十一日

文部大臣 理學博士男爵菊池大麓

第一條ヲ左ノ通改ム

醫術開業試驗ヲ受ケントスル者ハ此規則ニ據ルヘシ

第二條中「内務卿」トアルヲ「文部大臣」ト改ム

第九條及第十條中「内務省」トアルヲ「文部省」ト改ム

附 則

本令ハ明治三十六年四月一日ヨリ施行ス

○文部省令第十號

明治二十二年内務省令第三號藥劑師試驗規則中左ノ通改正ス

明治三十六年三月三十一日

文部大臣 理學博士男爵菊池大麓

第一條ヲ左ノ通改ム

藥劑師試驗ヲ受ケントスル者ハ此規則ニ據ルヘシ

第四條中「内務省」トアルヲ「文部省」ト改ム

附 則

本令ハ明治三十六年四月一日ヨリ施行ス

○文部省令第十二號

官立ノ專門學校及實業學校ノ修業年限、學科目及其ノ程度並豫科研究科及別科ニ關シ文部大臣ノ認可ヲ受ケ定メタル從前ノ規程ハ仍其ノ効力ヲ有セシム

附 則

本令ハ明治三十六年四月一日ヨリ施行ス

明治三十六年三月三十一日

文部大臣 理學博士男爵菊池大麓

○文部省告示第九十六號

同一テ文部省直轄諸學校中ノ二箇以上ノ學校ニ入學ヲ出願シル者ハ其最前ニ入學ヲ許可セラレタル學校ニ入學スヘキモノトス但シ同時ニ二箇以上ノ學校ニ入學ヲ許可セラレタル者ノ入學スヘキ學校ハ本人選擇ニ任ス

明治三十六年四月三十日

文部大臣 理學博士男爵菊池大麓

○文部省告示第九十九號

明治三十六年文部省令第十四號專門學校入學者檢定規程第八條第一號ニ依リ無試験檢定ヲ受クルコトヲ得ル者ヲ指定スルコト左ノ如シ

明治三十六年五月六日

文部大臣 理學博士男爵菊池大麓

一 學習院中等學科及元尋常中學校卒業者

一 官立台灣總督府國語學校中學部卒業者 以後ノ卒業者ニ限ル

一 師範學校、元尋常師範學校、元師範學校高等師範學科卒業者

一 女子師範學校卒業者

一 東京府私立明治學院普通學部卒業者 以後ノ卒業者ニ限ル

明治三十三年七月十七日

一 東京府私立青山學院中學科卒業者 明治三十四年五月三日以後ノ卒業者ニ限ル

一 東京府私立眞宗東京中學卒業者 明治三十三年二月二十七日以後ノ卒業者ニ限ル

一 東京府私立第一佛敎中學卒業者 明治三十五年二月十九日以後ノ卒業者ニ限ル

一 三重縣立眞宗勸學院中學科卒業 明治三十五年九月二十日以後ノ卒業者ニ限ル

一 東京府私立新義眞言宗叻山派^{高等}尋常中學林高等科卒業者 明治三十四年十二月十八日以後ノ卒業者ニ限ル

* * * * *

* * * * *

會 告

○寄贈及交換書目

(五月三十一日迄) (ニ領収ノ分)

日本醫事週報

四六、七八、九〇、一一三、三四五、六七、八九〇、一一一

同 社

醫海時報

四五、二三四、五六七八九、四〇、一一三、四五六七八

同 社

公衆醫事

六ノ一〇、一一七、一一

同 會

京都帝國大學醫科大學

解剖教室ニ就キ

壹部 鈴木文太郎君

植物學雜誌

七ノ一九、二、三四、

東京植物學會

衛生談話

二五、六七八九、

通俗衛生茶話會

東京醫事新誌

一二三、四五、六七八九、一〇〇、一一、二三四五六七八九

同 局

中外醫事新報	五四九、五〇、一、二、三四五、六、六、	同	社	藥學雜誌	二五三、三四五、	日本藥學會
日本助產婦新報	六、二、三、四、	同	發行所	好生館醫事研究會雜誌	一〇ノ一二、	同
助產ノ栞	八二、三、四、	同	緒方助產婦學會	中央醫學會雜誌	五、二、	同
醫事新聞	三二、三、四、五、六、七、八、	同	社	新築外科各論	前編上卷壹冊	同
東京醫學會雜誌	七三、四、五、六、七、八、九、一〇、	同	會	岡山醫學會雜誌	一五七、八、九、六〇、	同
神經學雜誌	一ノ六二ノ一、	同	會	大日本私主衛生會雜誌	二二七、八、九、四〇、	同
國家醫學會雜誌	一九〇、一、二、三、	同	會	醫談	七九、八〇、一、二、	同
杏林之栞	十五ノ一、二、三、四、	同	會	學士會月報	一八〇、一、二、	同
藥石新報	四、五、六、七、八、九、四〇、一、二、三、四、	同	社	獨逸語學雜誌	五ノ六、七、八、九、	同
研瑤會雜誌	五、三、	同	會	軍醫學會雜誌	一三四、五、	同
成醫會月報	二五、一、二、三、四、	同	會	日本眼科學會雜誌	七ノ二、三、四、五、	同
醫科器械月報	九、一〇、一、一、	同	社	須天堂醫事研究會雜誌	三六、三、四、五、	同
臺灣醫學會雜誌	六、七、八、九、	同	會	學友會雜誌	一三、	同
產科婦人科學雜誌	五ノ二、三、四、四、五、	同	會	廣島衛生醫事月報	五〇、一、二、三、	同
東北醫學會々報	二七、八、	同	會	愛氏新內科書	壹部七冊	同
アルベ外科各論	後編二、三卷二冊	同	會	集成藥物學	壹部五冊	同
大坂卜博覽會	壹部壹冊	同	會	產婆學雜誌	三九、四〇、一、	同
		吐鳳堂書店	木村孝藏君			日本產婆學協會

明治三十五年醫學
科卒業生加納景成
君外四十名

藝備醫事 八二三、

校友會雜誌 三〇、

藥理學 後編壹冊

東京教育時報 三〇、

中央婦人科學雜誌 一ノ二

北越醫會々報 一三、四、

日本消化機病學會雜誌 一ノ五、六、

同窓會雜誌 一〇、

濃飛醫學會雜誌 七、

大日本耳鼻咽喉科會々報 九ノ三、

齒學研鑽 四ノ一

醫學中央雜誌 一、二、三、

北海醫報 三三、

躬行會叢誌 八、

皮膚科及泌尿器科雜誌 三ノ三、

北辰會雜誌 三、

校友會雜誌 八、

同 發行所
京都府立醫學校同會

吐鳳堂書店

東京市教育會

緒方婦人科學會

同 會

同 會

愛知縣立醫學校同會

同 會

同 會

富安齒科治療所

同 社

北辰病院研究會

同 會

同 會

第四高等學校同會

東京慈惠醫院醫學校同會

新纂外科各論 前篇下卷一冊

校友會雜誌 二、

福井縣醫學會雜誌 五、

靜岡縣醫學會々報 六、

下平用彩君

千葉醫學專門學校

同 會

同 會

○會費領収 (明治三十六年) 五月卅一日迄

金參圓 五ヶ年分 (自三十五年分至三十九年分) 上

金參圓 壹ヶ年分 (自三十五年分至三十七年分) 上

金壹圓 壹ヶ年分 (自三十五年分至三十七年分) 上

金參圓 壹ヶ年分 (自三十七年分至三十五年分) 上

金壹圓 壹ヶ年分 (全) 上

星子 元真君

高松 多齊君

大西 瀨治君

徳木 千秋君

平田 一若君

藤岡 勝治君

田代 保二君

